

を示すものである。「聖書」には天使がエデンの園（ムーの國）を火の劍で守つて、アダムとイヴとを入れさせないことが記してある。エヅラはモーゼの書いた埃及の複合象形文字を読み過つたのである。（無飾りの蛇を Can と云ふのは過りである。水の象徴としての蛇は Khan であつて、Can は數の四を示し、普通四點又は四個の圓周、四個の圓盤、四本の光芒で表はされる）「舊譯聖書」の最初の本は、モーゼが埃及神殿の記録から書き取つたのであるが、彼は象形文字及び象徴をその儘記した。それを後の者がヘブライ文字に譯する時に、象形文字や象徴を解釋し誤つたのだ。殊に偶像崇拜や動物崇拜の時代になつてゐたから、解釋が間違つて來てしまつたのだ。今日から三千年程以前に、神官や僧侶達に依つて偶像崇拜、動物崇拜、木石崇拜、人間犠牲等と云ふことが始められた。マヤ、埃及、フェニシア等に於て、宗教は大に墮落したが、殊に埃及の第十八王朝の時がその極盛を見せた。

「舊譯聖書」に依ると、モーゼは人間は特別に作られてエデンの園に出發したと云ふことを記してゐるのだが、そのエデンは「聖書」の記す所では、地質學的に在り得ざる所になつてゐるし、河が山の上に昇つて行くことに書いてある。どうしてかゝる過りを來した

かと云ふと、學問を深く修めたモーゼが初めにこの過りを書く譯なく、翻譯者の罪なのである。モーゼの初めに書いたのは、泥の碑文とパピルス紙とで書いたのであつたが、埃及を彼がイスラエル民族を率ゐて出てから八百年後に、エヅラがモーゼの書いた本其他の物を集めて、他の協力を得て聖書にしたのだが、モーゼにのみ分つて他に分らぬ象形文字を過り譯した結果である。それは、モーゼの原本となつた物と同じ物が、埃及、カルデア、印度、マヤ等に記録として残つてゐる故、それと比べると一目瞭然たるものがある。モーゼの書いた第一巻は、母國ムーからビルマを通つて印度を過ぎて、そして埃及に行つた所の、ムーの神殿にあつた記録の寫しの泥の碑文の「魚生記」であつたのだ。従つて、「洪水」の件は、後に書き加へたものなのである。その寫本が埃及に渡つた時には、エデン即ちムー帝國には洪水は無かつたのだから。又ムー帝國沈下以前には、犠牲なる言葉は絶対に無かつた。それが出て來るのは、ムー帝國の破壊された道筋を書く爲に作られたことなのだ。又祭壇の火と云ふのは、愛慕する母國ムーを記念する一種の象徴なのである。

祖先崇拜は、人類一般に共通の事柄であるが、この風習の作られたのは何所で何日のことであつたかを、今各國の記録に依つて少し調べて見るならば、先づ埃及の古文書「パピ



ルス」第四卷（ブーラック博物館藏）「墓の谷に休む汝の父母に犠牲を捧げることは、犠牲其物が自ら其所にやつて来たように神々に認められることとなる。度々死者を見舞ふことは、死者の爲に爲した事を死者が行なつてくれるようになる」印度の「ダルマ・ラストラ」には「祖先の靈の名譽の爲に行なふ儀式は素晴らしい。婆羅門は神々の崇拜の爲に行なふ。神々への犠牲は、祖先の靈に供へて効果を増すと宣べる前に行はれる」支那の孔子は、「祖先の名譽の爲に祭りを行なふことを記し、春秋二回に祭を行なひ、現在ある如くに祖先に供物を捧げることが必要である」と述べてゐる。日本に於ては、七月十五日に祖先の爲に祭りをする。果物野菜を位牌に捧げる。ペルーでは「インカのお伽話と祭禮」の書に「この祭は、死せる友や親達の記念の爲に行なふもので、涙と悲歌と訴へるが如き音楽が奏される。死者の墓を訪ね、穀物を墓の内部の屍體の傍に置く。アヤ・マルカの月には、死者の爲に大きな祭りが催される」中央アメリカでは、ル・ブロンゲオン博士に依ると「今日でも中央アメリカのユカタンのベタン其他マヤ語を使ふ所では、十一月初に木の枝に穀物と肉とで作つた上等の菓子を吊下げて、死者の魂に捧げる。R G ハリブルトンの記事に依ると「昔の通りに今日でもペルーでは、印度や南洋諸島濠洲等と同様に、十一月の初めに祖

先崇拜の祭りを行なふ。これは古代ペルシャ人、埃及人、北歐羅巴に於てもさうであつた。日本、印度、濠洲、古代ローマに於ては、三日間に亘つて祭りが行はれた」中央アメリカのウズマルの神聖神秘の神殿の柱の間には、大祭壇があつて、その奥の扉の中の内部の部屋には、祖先の靈を祀り、供へ物をする。この供へ物をする風習は、母國ムーから来た神聖な儀式とされてゐる。形式は多少變つても、古代の通りに大體行はれてゐる。墓には花が捧げられる。



## 第十六章 日本語と南洋中米の言語關係

マヤ語は、世界各國の言語を含んでゐるが、特に日本語は、カラ・マヤ語を半分含んでゐる。故に、南洋諸島及びメキシコ、印度人間等に於ては、日本人は通譯を要せず、自由で話しが出来る筈である。印度の大部分は、ナガ・マヤ語である。カナダのシンガレスには、元の儘のマヤ語が一杯に残つてゐる。歐羅巴の言語は、全部この變形したものである。殊にギリシャ語のアルファベットは、カラ・マヤ語の單語で組立てられてゐる。又メキシコ印度人の言語の半分はカラマヤ語である。インカ帝國もさうであつた。古代のアッカド人とカルデア人の言語は、ナガ・マヤ語であつたし、埃及語も同様である。

然し、時は言語を變へるのが當然だが、語根は残るものである。例へば、ギリシャの *g* は、マヤ語の *k* に置換へられるし、*d* はマヤの *t* に、*r* は *l* に夫々變へられるが、この *r* は、他の國の言語に於ても、多くの場合に *l* に變へられるのが普通である。又各國に於て

*e* は *k* と發音されるが、これはマヤ語から來た證據である。書く技術に依つて、言語は變化を來す。マヤ語の文法は、失はれた儘不明となつてゐる。マックス・ミュラーの云ふように「元は一つの源の言語であつた」ことが、確證された譯だ。各國語は、その或語に於てその語根が互に同一で、同意味を持つのが多いのはこの理である。梵語サンスクリットの古代語は、印度、ヘルシヤの古代語と共通し、ギリシヤ語、ラテン語、英語等の比較研究は、同一起源を證明する。即ち此等はムー國からの殖民達の子孫であるが故である。此の言葉の多くは、普通の物の名、人名、器物の働きを示す語、家族關係、數學、名詞、動詞の語尾の變形方等は、大體皆同じなのである。借用と模倣とを別にして、言語とその形式とを、殖民的アリアン人種が諸方を持ち歩いたものと思はれる。然し煎じ詰めると、皆マヤ語に歸るのである。

然しながら、現在のマヤ語は、五千年、一萬年以前の物とは違つてゐるのは當然のことである。所で、現在のマヤ語が英語に近いのは、それは征服者達の持つて來た言語が、それと混入したからである。殊にアツテックやナファートルの持つて來た言葉が、甚だ多く現在のマヤ語に混つてゐる。元のマヤ語は、甚だ縮つた形の物で、最も短く、そして、一



語が多くの意味を持つてゐて、その意味は文中の位置に依つて定つてゐたやうだ。又綴りが一つ以上あつた場合には、その語のアクセントの位置に依つて意味が違つたらしい。例へば、マヤ語の *na* は「土地」<sup>アリス</sup>「國」<sup>カントラー</sup>の意味を持ち、埃及語の *na* は「母」<sup>ペー</sup>「土地」<sup>アリス</sup>「國」<sup>カントラー</sup>を示してゐる。又名詞、動詞、形容詞に接頭語がつくと否定の意味となるが、これはギリシヤ語、シンガレス語に於て同様の現象を呈してゐる。

ナガ・マヤ語の單語がどの位の意味を持つかを左に示す。

Naga - mayn	English
Be	to go, to leave, to walk, to move, to progress.
Chi	a mouth, an opening, a border, an edging.
Ka	the soil, barriers, sediments, anything ejected.
Kachac	exceedingly, abundant, plentiful.
Kab	a hand, an arm, a branch, anything extending.
Kar	to finish, a fire, to burn, to destroy.
Kul	to worship, the seal, the rump.
Lal	to empty, to take away, to disposed of.

Ni	a point, a ridge, a summit, a mountain.
On	circular.
On-onx	circular, whirling, whirlpool, a tornado.
Paá	a break, an opening, to open.
Ta	where, a place, smooth, ground, leve ground.
Tan	towards, near, before, in the center.
Tel	deep, depth, bottom, abyss.
Zi	cold, brozen, vapor, smoke.
Ha	water, moisture.
Pe	come, from, our.

古代語は、多くの意味を持つので、今日の語に古代の思想を譯すには、多大の困難を感じるが、殊に譯者の心理状態に左右されるものであるから、東洋的心理を持つ人は、これを譯すと譬喩的な文飾の多い、花の如くに誇張された文章となるのが普通で、若しも譯者が、冷淡な心の持主であつた場合には、その譯文は冷たい、鈍い、無作法な短い文章となるであらう。



## 第十七章 鬼の概念と三位一體の思想

鬼と云ふ概念は、古代からあつたもので、創造の歴史や傳説中に多く見出されるが、その起源は、メキシコの碑文に依つて知るより他は無い。

四大原始力があつて、大創造神の命令で創造を行なひ、その完了した時に、その四大原始力即ち四大原動力は物理的宇宙に變つた。そして、太古には、これを「四個の天柱」と呼んだ。それは、作り上げた物を支へてゐると云ふ意味なのである。然し、其他の意味をも持つ。即ち「天の柱」とは、天に住む神の柱と云ふ意味である。地球の古代象徴は、四角であつた。方位基點の四點を持つ所の東西南北である。天が四本柱に支へられてゐると云ふ概念は、四本柱が地上の方位基點の四隅に於て休んでゐると云ふことになる。その象徴として柱の代りに支持者を置くことにした。これが四個の鬼なのである。

マヤ族はバカブと稱して、黄色い鬼を西、赤鬼を東、白鬼を北、黒鬼を南に配した。埃

及ではアメンタイと稱して、東方の隅にはアムセツト、西方の隅にはハブ、北方の隅にはテサントムツ、南方にはクアブセネフの鬼を夫々配置した。カルデアでは四個の鬼を人面牛身のキラブ、人面獅身のラマス、人間に能く似たウスター、鷲頭のナティグの四種に分つた。印度では、東方に坐る天神のインドラ、西方に坐る水神ヴァルナ、北方に坐るのは富神のルーヴェラ、南方に坐るのは死者の審判官ヤマを四鬼にあてた。支那では四方にゐる鬼が國家を指揮すると考へた。それは山にゐるので、泰山は東方、セイン・フウは西方、チエン・シは北方、ホウ・コワンは南方を治めるものと思つてゐた。猶太人はモーゼの書き残した本には記してないが、エゼキール第一章十節中には彼等の概念が記されてゐる。「彼等鬼の四個は、人面、獅子面、牛面、鷲面」第十章第十四節には「第一面は天使、第二面は人間、第三面は獅子、第四面は鷲」とあるが、これはエゼキールの幻想として記されたもので、これを記したのは、カルデアにエゼキールの捕はれてゐた最中のことであるから、これとカルデアの物と比較すればよく分る通り、彼はカルデアの其を見たのである。彼の囚はれてゐた時、まだかうした概念がカルデアに残つてゐたことが分る。

所で、現在南洋諸島に於ては非常にこの鬼を恐れる思想を持つてゐて、古代遺蹟の石窟



古代神殿の内部等には鬼が居るからと云つて、入る事を嫌ひ、絶対に案内もせぬと云ふ。

三位一體の思想は古代からあつた。彼等は三位一體は、神の頭と思つてゐた。人間當初からの思想だと云へる。哲學者も亦この思想を持つてゐる。基督教徒や婆羅門信徒に依つては、今日も尙甚だ神聖な物として保たれてゐる。

三位一體の古代象徴は、神聖なる象徴中の最古の物で、それは等邊三角形であつたのである。現在南洋に於ては、これが夥しく遺蹟の上に見られる。この象徴のある所には、その形状が如何様であらうとも、神の居る所と固く信じられて、天を尊敬する所となつてゐる。

マヤ族の三位一體の象徴は、現在ユカタンの古神殿上に等邊三角形として刻みつけられてある。只その古代の名前は分らない。

グアテマラの「ポボル・グー」には「創造神ヅコールが萬物を作り、彼の意志に依つて宇宙が存在することになつた。その名はビトル（作る者）アロムは生ませる物、クハロムは存在を與へる物」と記されてゐるが、その三位一體の神ヅコールは集合的の神として示

されてゐる。

ペルーのインカは見えざる大存在を尊んだが、この存在が萬物を作つたと考へた。そして、これを、不可解なる存在バカ・カマク・ヒと呼んで三位一體の頭の所に立たせた。

印度では「スミ・サンタラ」中に名無き大神を等邊三角形に依つて三位一體として描いてゐる「ニロウクタ」なる書物には「三神あつて、この神々が全一天帝を任命する」と記してある。その名をブラジャバチ又は時としてマハトマと呼び、萬物創造の主であつて、集合神と見てゐた。

カルデアでは、エンソフと云ふ大光明を、三位一體とする等邊三角形で示してゐる。

埃及では、この三位一體の神の頭を、シヌ、セト、ホルスで示してゐる。

ギリシャでは、プラトーンとオルヒニーとが、三人の王ファネス、オウラヌス、クロノスを三位一體と見てゐた。プロクルスは、更にそれを確めて「デミウルゴス又は創造者は三であつて、天帝の三成分は、三智又は王である。彼は存在し、所有し、見る」と云つてゐる。數學者のピタゴラスは、弟子に神を教へて云ふのには、「神とは數と調和である」と云つて、數と等邊三角形を神の名に依つて尊ぶことを教へた。



基督教の寺院の古いカトリック教寺院内の主な祭壇の上には等邊三角形に一眼を描いた物が置いてあつた。これは初め埃及に於て行はれた方法である。「オシリスは萬物を見る眼」と云はれてゐるのがそれである。

印度に於て三位一體の概念の起源を得ようとしたが、結局母國ムーに戻らざるを得なかつた。それは或日、印度の友人が云ふのに「真理か神話か知れぬが、母國ムーは三陸地から成つてゐて、三陸地ともに神々に依つて作られたもので、その三部分は、三角形の各邊の如くに結びついてゐるのだ」と、私に語つた。

## 第十八章 神秘なる神殿内の儀式

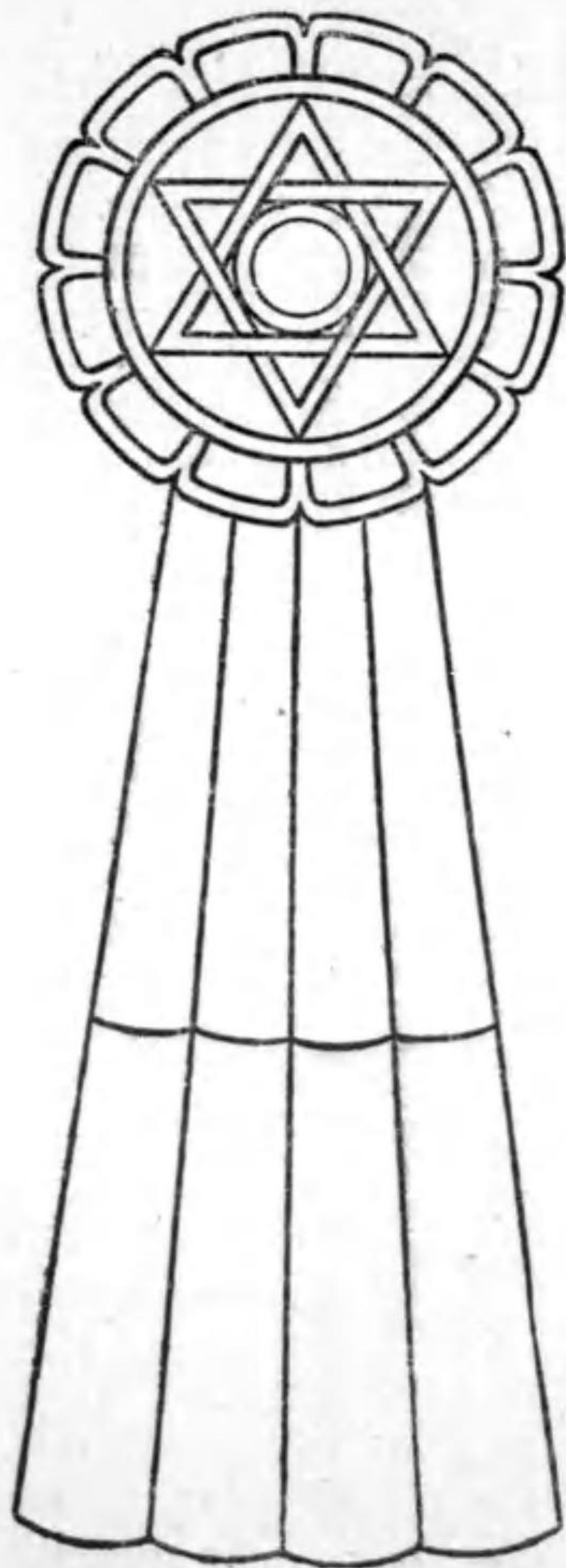
「ボボル・ヴァー」と埃及カイロ市の大ピラミット内の記録に依つて、古代の神殿内に於て行はれた神秘なる祭祀や儀式の様子が分つたが、精神鍛錬の様も亦分明となつた。即ち今日南洋諸島や中央アメリカに遺つてゐる石造神殿内で行はれた精神鍛錬の有様は、略次の通りなのである。

第一室手ほどの部屋——此所では、初心の新願者は、最初の傳授法として二本の河を渡らされる。一本の河は泥河であり、一本の河は血の河であつて、共に渡るには、中々危険である。次には四個の道路を通過して、白、赤、青、黒の衣を着た神官達十二名の前に出るのだが、この神官達は面を包んでゐて、中に木像も混つてゐるその真物の神官を見つけて、その前に行つて、初心者には色々の教へを受けるのである。この部屋は、人々の分別心を試す所になつてゐるのである。其所で他の者達と互に挨拶を交はし、名を名乗り合ひ



世界最初の著書とも云ふ可きもので、今から三萬五千年以前にムー帝國に於て描かれたる宇宙構成の説明書

中央圓は太陽即ち天帝を示し、外部圓周上の十二區分は天に通ずる十二の門を（各門には主の徳がある）表はして、靈魂が天に昇るには十二徳を修む可き事を示す。外圓は中間世界であつて、十二の誘惑におびやかされてゐる事をも物語る。下に垂れてゐるリボン形の模様は、同じく靈魂昇天に通過す可き八道を象徴する。俗世門を解脱して清淨な魂となつて、初めて天に昇れることを物語る。



更に招かれて座を占めることゝなるのだが、尊敬心を忘れると酷いことになる。そして教育と特別な用意の缺乏してゐることを後悔する場合が多い。と云ふのは、命ぜられて腰を下さうとすると、その椅子は、焼けた熱い石だからである。靜かに坐することを拒むのが良いのである。とに角、此所で首尾よく及第をしてから、次の部屋に進むことゝなる。

第二室暗い部屋——夜、暗室を通つて第二室に入るのだが、番人は、入門者が外界と交渉を全く絶つように注意をする。そして、一本の松明たいまつと一本の煙草とを與へるが、これはこの部屋に居る間に消すことが出来ないし、燃し盡すことも許されない。夜が明けてからそれらはその儘に戻さなくてはならない。消したりすると、恐ろしい懲罰に會はされて死に至ることもある。無事に松明と煙草とを翌朝戻すことが出来てから第三室に進む。

第三室槍の部屋——第三の試験所は、槍の部屋であつて此所では他人の力を借りずに、珍しい花の活つた四個の壺を持出さなくてはならない。その間に非常に上手な槍使ひが突掛つて来るから、それを避けなくてはならない。然もそれは暗い夜中のことであるが、夜の明ける迄に槍の難から巧みに身をのがれつゝ壺を持ち出さなくてはならないのだ。

第四室氷の部屋——此所では猛烈な寒氣と戦はなくてはならない。



第五室虎の部屋——激怒した虎のゐる部屋で、喰はれることの無いように身體を處置しなければならぬ。

第六室火の部屋——燃える釜の中に、日没から日出迄ゐなくてはならない。これが終つて、いよいよ最後の第七室に入る資格が出来て来る。

第七室蝙蝠の部屋——此所には蝙蝠が一杯にゐるし、人を殺す武器が並べてある。神が高い所から降つて来ると、受験者の眼に見えたなら、それでいゝのである。

かうした一種の宗教儀式が、古代の神殿内に行はれたのだが、現在の南洋諸島に於てはかうしたことは全く忘れられ、知られてもゐないようだが、グアテマラの山中の古代神殿ジバルバ内では、今日も其が行はれるので、ル・ブロンゲオン博士は、其所でその實際を見學したと報告してゐる。それに依ると、受験者は、豫めよく教へられて、十分の仕度の下にこの修練道場に導かれて行くのだと云ふ。

この儀式は、頗る象徴的の物で、いよいよ人間の最後が来た時に、慌てずに用意の出来ることを教へるのだと云ふ。

所で、一方の埃及に於ては、これと略同様の事が行はれるが、少々違つてゐる。埃及の

神殿内の精神鍛錬所は、入口が北方に向つてゐて、其所に等邊三角形の石が一個四角を石の上に据えてあつて、それは回轉するようになってゐる。これは、天と地の象徴なのである。其所を通つて、現在から未來の生活の路を象徴した所に赴くが、十二の入口を通過する間に、秘密と試験が行はれる。

第一室は全く見えない。全くの暗黒だからで、其所はホルス神に守られてゐる。此暗黒無の世界に入ると、受験者は盲者となつたも同然で、感覺は皆失はれてしまふのである。只動作をする感覺のみが残る。此所は指導者に導かれて通るのである。そして、下つた所に又導かれて行くが、其所に於て彼の靈魂は、天降る精靈に依つて甦るのである。

次に焔の部屋に入つて、火を消すのである。「死の書」第二十二章に依ると「私は来た。心中に望んだ事を爲した。焔を消すや否や、彼等は現はれた」第二十五章「彼をして彼の名を焔の部屋の中に残さしめた」

次に天の大きな水平線の入口を通つて行つて、質問を受けるのだが、巧く答が出来て初めて物を見ることが出来るようになる。即ち一つの光線が與へられるのである。其所には親切な案内者も居る。



次に影の室に赴いて、試験に及第したら次に進む。凡て一室から他の一室に進む時には或言葉を與へられて、それを忘れずに次の部屋に持つて行つて答へなくてはならない。かくて、真理の部屋と云ふ十番目の部屋に入る事になるが、此所は白黒の石で敷詰められてあつて、これは正と邪、真と偽とを示してゐるのだ。

其所の次は、更生の部屋であつて、魂の更生が行はれる。此所には空の棺桶があつて、死の寓意畫が描かれてある。小さな穴から輝く星の光りが差し、ソシエの光りが入つて来る。つまり、受験者は、墓場から出たことを意味するのである。

次に靈魂の光輝ある資格許可が行はれる名譽のある場所に赴くが、其所で種々の経験を積まされて、他の門から身をかゝめて通過して、太陽の王座の許に赴き、一人前の教師になることが出来るのである。

創られざる光から、未來の幸福を引出すことが出来るようになる。遠くから、彼自らを見る事が出来るようになったのである。この試験は、頗る嚴格を極めたものである。

この埃及の方法とマヤの方法とを比べて見るのに、先づ第一に埃及の試験室は十二室なのに、マヤのは七室となつてゐる。暗室は双方同じだが、マヤは火の釜であるのに、埃及

は焔の室になつてゐる。埃及の死の室に相當するのは、マヤの蝙蝠の室である。ムー本國滅亡後、各國の者は、如何なる方法かに依つて、それを象徴化して「ムーの記憶を、後の時代の者に忘れざらしめぬ爲に」努力をしてゐる。此等の宗教儀式も亦この記念の爲の象徴化と見ることが出来るであらう。即ち、ムー本國の破壊の場面を通じて、精神の鍛錬を行つてゐるのだ。生活を通じて、記憶の中に母國を置かうとするのである。



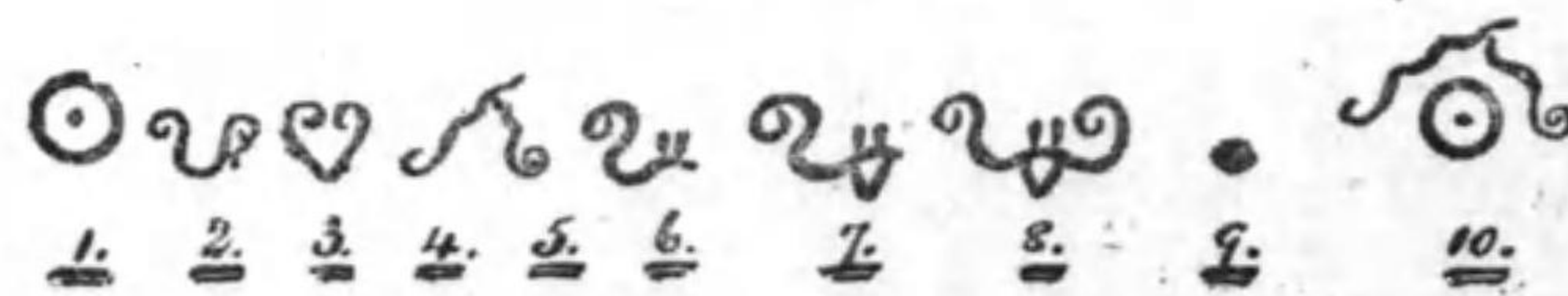
### 第十九章 全世界に分派したマヤ族

母國ムーの人口が、稠密して来た時、大航海者や野心ある企業家達が、新らしい有望な土地を見つけて、其處に殖民的發展を行なふことゝなつた。この殖民達をマヤと稱した。ムー國から四方に出て行つた殖民達を凡てマヤ族と呼ぶのである。

この殖民政策は、少くとも七萬年以前の頃から行なはれたものと思ふ。それは、東洋に残されてゐるナーカルの記録に依るとさうなつてゐる。そして地球上の各所から發見される最古人類の遺物から推して、此等殖民隊の出て行つた方向及び方法が、大體窺ひ得られる。その遺物と云ふのは、象徴文字、繪畫、石碑、古代記録等に依つて、斷片的にそれらの事が知られるのである。

その殖民政策は、大體に於て二種類に分つことが出来る。即ちムー帝國を中心として、此所から東西に移民隊が派出されたのである。この二種の本線から、多數の枝線が派生し

マヤ文字を以つて記されたる碑文の一種





碑文を解説すると左の通りとなる。

(1) 創造神の象徴(大統治者、王中の王ともムー國を呼ぶが「コルナシアヌス寫本」ではムーを凡て大統治者と呼ぶ)(2) ムー世國のUの象形文字にて、深淵の象徴ともなる。(3) Uに覆没の意味を加へた合成象形文字。即ち陸地の陥没を表はす文字。(4) 大海の押寄せ来る象徴。太古には水の象徴とさる。(5) 地下の火と地下の路との合成象徴(6) Kuhlund (ムー國)と云ふ言葉。(7) タイランドは死せりと云ふ二語の合成物。(8) 「タイランドは死して沈めり」と云ふ文章を表はす。(9) 柱と地震の象徴。(10) 大統治者は火焔の淵に落ちた——この全體の意味は、「地上の大統治者タイランドは、滅亡した。その國は地震に揺られて、波浪の如くに動揺し、遂にその國を支へる柱は碎けて、その國は火の深淵中に陥り、大統治者は滅亡し、地下の窟は立昇つて、その國を包んだ。次で大海はその國の上を捲ふた。大統治者のタイランドは、かくて陥没した」

たことは勿論である。それと同時に、短い獨立した支線も亦ムーから發生してゐる。所で、その本線たる東西二方面に向つた二大殖民團の何方が先きにムー本國から出發したかは今の處記録が発見されてゐない。然し、埃及ナイル河の三角洲上に出來た古いマヤ族の殖民地は、一萬六千年以前に出來たものであることだけは發見出來た。又主線に添つて出來上つた最初の殖民地が、略同時代に出來たものであることも、種々の記録に依つて知ることが出来るのである。又最初に出來た殖民地の所在地も、明瞭に知ることが出来る。

東方に赴いた東方本線の初期の殖民地は、今日の北部アメリカ、中央アメリカの太平洋

に面した西海岸であつた。これに反して西方に赴いた西方本線の最初に移民を築いた場所は、アジアの東海岸の太平洋に面した所である。この双方の殖民地に於ける象徴は、共に太陽の形であるが、然し、それは光芒を持たない太陽の形と、水平線を昇る太陽の形の物であつた。

此等の殖民地が、母國から來た君主を上を戴いて、國家として自己統治の出來るまでに進歩した時、初めて其所に殖民地的帝國を形成するに至り、水平線を昇る太陽の形の象徴は、光芒を持つことが出來たのである。そして、その國の統治者は、本國ムー帝國から「太陽の子」と云ふ名稱を興へられたのである。即ち「太陽の帝國」たるムー國の子供の國たる事が認められたのである。



## 第二十章 全米・埃及・歐羅巴の開拓

東方殖民線は、主線を二本持つ。第一線は、ユカタン半島から中央アメリカに走るもので、其所からアメリカ大陸を越して大西洋に出て、アトランチス大陸に赴き、其所から東航して地中海に入り、東航を續けて、小アジア、ダーダネルス海峡を通つて黒海の東南岸に到るものである。その枝線は、アメリカに上陸せず、アメリカの西海岸に沿つて南下して、南米の西海岸のチリに赴く物と、中央アメリカ大陸を越して、その東海岸を南下して、南米アルゼンチンに到る物とがあつた。又更に大西洋を越して、歐羅巴の南西部とフリカの北西部とに赴いた線があり、又地中海の北部と南部とに分れた物があつて、南航の最後は埃及ナイル河の三角洲に於て下エジプト國殖民地を築いたのである。これが第二線である。

この他の東方線に就いては、不幸記録が無いが、極く僅かの證據と古地圖とに因つて、

これを知るばかりである。それは、母國ムー帝國の南西部から南アメリカに渡つた一團が南アメリカの西岸からアマゾン海へと運河を遡つて入り込んだものである。(太古南米中央には大西洋と運河に依つて通ずる大なるアマゾン海があつた)又一方西部アフリカと交叉をして、アトランチス大陸の南岸に沿つて發達をした一隊がある。所で、この方面に來た種族は、黒人種であつて、ネグロ人及びインド人がそれであるが、メラネシアを含む南西太平洋諸島にもこの種族が散布された。然し、黒人種のみではなく、白人種もこの線にはゐたので、今日のギリシャ人の基を爲すカラス族或はアリアン族が即ちそれである。

この他にも東方に走る主要線は三本ある。その第一線は北米のネバダに、第二線はメキシコ灣に、第三線はベルーにそれ／＼赴いてゐる。(其所にあつた運河は、破壊はされてゐるが、太古の面影を残してゐる。南米チチカカ湖附近のアンデス山の頂きにあるのが、それである)

北米最古民族の遺跡は、アラスカからホーン岬の間に見出される。又その西部に三四個所の古代文明の遺跡が見出される。その一個所以外は、地震の爲に潰滅に歸してゐる。即ち西方山脈の隆起の爲に破壊されてしまつたのである。ウタ、ネバダ、新メキシコ、アリ



ゾナ、コロラド、メキシコ、中央アメリカ等には、今日尙考古學者に豊富なる研究材料を提供してゐるのである。地球上に於て、これ程古い材料を興へてくれる所は、他に無いと云へる。これに依つて、テルテリア朝及びミオセン時代の古い研究を爲すことが出来るのである。此等の土地に現住する民族の、萎びた顔のその皺の中から、太古の秘密を読み取ることが出来るのだが、彼等は餘りに老い過ぎて純朴過ぎるから、その研究には、十分大きな心を持つ必要がある。先づ彼等の言語を研究して、そして、フリント弓と槍の頭と、奇怪なる詩と繪畫とから、古代文明を探り出すより外はないのである。

北アメリカの一部を占めてゐた最初のクエツアル族は、今日では傳説のみを残してゐるが、一八九〇年に中央アメリカのインド人から、ホンデユラスとグアテマラの深い森林内に居住する鶯色白人のインド人のゐることを物語つて貰つたが、彼等はマヤ語を用ひて居り、彼等の祖先のクエツアル王が敗北して、森林中に逃避して以來の子孫達である、と云ふことである。

ユカタン人は、ビグミス人に就いては何も物語らないが、ユカタンの東岸とその諸島上には、ビグミス人の家屋と寺院のあつたことは、間違ひの無い事實である。この土地の土

人は、餘り古くはないが、然しこの土地に太古居住してゐたビグミス族の傳説を、多數に知つてゐる。又ニスキュート、メキシコその他から發掘される石の遺物に依つて、このビグミス族は、小人であつたことが知られる。即ち彼等の家屋は小さくて、天井が低く、コズメット島の小神殿の入口の高さ三呎、幅十吋である。英領ホンデユラスに於て狩獵者の語る所に依ると、山中の暗い谷で出逢つた小人は、ビグミス人らしく、色は黒く丈は三呎位で、黒い髪毛を房々と垂らしてゐて、マヤ語を流調に話してゐたと云ふのである。

さて、このクエツアル人と稱せられるのは、クエツアルコートル蛇から出た名前であつて、このクエツアルコートル蛇と云ふのは、宇宙創造の象徴とされてゐるのである。彼等は、ムー本國を出發して、米國の陸地を發見するや、静かな内海に船を入れて、其所から河を廻り陸地に上つて、其所に天幕を張つた。その附近には他の人類の居ないのを見て、その事を本國のムー帝國に報告をした。その新發見の土地と云ふのは、今日のメキシコのことである。その時は、今から五萬年乃至十萬年以前のことである。そして、この新國土に一隊が殖民を行なふことゝなつた。初は南方に赴き、次に北方に赴いて、ユカタンと中央アメリカとに仲間は擴がつて行つた。今日のグアテマラに首都を設けて、其所に國王を選定した。



メキシコ程面白い所は無い。又このメキシコ谿谷程悲劇の醸し出された所も無いのである。この國の大都市には大神殿も築かれたのであるが、地震の爲にそれは波浪にさらはれ人民も皆死んでしまつた。その遺跡は、現今のメキシコ市から二十九哩北方の地下に深く眠つてゐる。ニーベン氏は其所から二千六百個の貴重なる石碑を發掘してゐる。此地震はメキシコ谿谷の地下の破裂に依つて噴火を生じ、海水の侵入を見るに至つたのだが、その時の熔岩は、今日も尙残つてゐる。それは、二十五哩を流れて、メキシコ市の縁に止つてゐる。その厚さ二十五呎。

一萬六千年程以前に、中央アメリカにあつた埃及式大陸が沈没したことがある。それに就いて、アツテックの傳説にはかう語られてゐる「ホルテツが（AD一五二一）メキシコを征服した時に、アツテックの神官が物語つた。昔々大水が谷を埋めて人を殺し、太陽を弱らせて、世の中を暗黒にした。其所で、神々は太陽を新たに作つたが、その新太陽に依つて、新世界が支配されることになつた」この代表的なアツテック物語りは、別々な二個の傳説から作り出されたものである事が知られる。其は、即ちメキシコ谿谷の陥没と、ムー本國の陥没との双方を物語つてゐることなのである。メキシコ谿谷の陥没は、ムー帝國

の陥没以前のことであつて、その沈んだ谿谷は、再び復活して、人類が居住するに至り、前代に比して、遙かに繁榮を見ることが出来た。然し、ムー本國の方はさうは行かなかつた「太陽の帝國」と呼ばれて、全世界を支配してゐたこの國の没落は、太陽の沈んだも同様で、太陽が水に溺れたも同様の大きな打撃を全人類に與へたのである。ムー帝國は實に人類にとつての太陽であつたのである。全地球の支配者、法律の統括者であつたムー帝國の消滅は、全世界を混沌たらしめた。然しながら、纏て新しい形態の新政府が、それらの殖民地に出来上つて、そして殖民地的帝國なるものが成立した。各自の完全なる自治制が其所から發生した。即ち世界歴史上の新時代は、その時以來出来上つたのだ。アツテックの傳説には、かうして二つの意味の事が物語られてゐるのである。

ムー帝國から初めて人類がアメリカ大陸に渡來して間もなくのこと、北アメリカの西部に於て土地隆起が起つて、山脈が出来上つた。メキシコを中心として、一方は西方に、一方は東方に山脈が走つて、その間には大きな谿谷が出来上つた。その深さ數千呎、その山脈の發生に依つて、人類は絶滅してしまつた。この北アメリカの西方山脈は、一萬千五百年より古くはないようである。この二つのメキシコ山脈は、岩山の連続であつて、その谿



谷の下床は、丸石と砂礫が一杯であり、海水に持ち來された貝類をその間に見出すことが出来る。然し、その海水は餘り長く又餘り深くはその豁谷を占領してはゐなかつた。と云ふのは、地底を海水で固めてしまふ程の壓力を其所に示してゐなかつたからである。そして、この不十分なる岩石は、山の上にも見出されるのである。埃及の方の記録に依ると、この岩の出來たのは、一萬六千年以前となつてゐる。そして、再び土地が隆起した後に、改めて新しい文明が其處に生れ出たのである。

メキシコに再度の探査を試みたニーベン氏に依つて、驚く可き発見がなされた。それはメキシコ市外四十五哩の所の小村落に於て、ニーベン氏は有史以前の、一大文明を發掘したからである。發掘物中には二千六百個の石碑が含まれてゐるが、此等は實にムー帝國の宗教と科學とを記載した貴重なる記録書とも云ふ可き物なのである。その碑面上の文字は十六個の文字と、二重母音とからなる多くの文字であつて、三種類の形態にそれを區分することが出来る。第一の文字は神官用の物で、隠れたる意味を示す象意文字。第二文字は一般用の通俗的なる文字。第三文字は形容詞と強調語の爲に使用される物である。Mは文字の象徴、Hは神聖の象徴、Aは神の象徴に使用されてゐるが如きがその例である。尙石

碑以外の物から、ニーベン氏は曲つた頭をした文字を發見して、それをモンベルの形を持つ文字とニーベン氏は稱してゐるが、之は、セミチックの文字である。と云ふのは、バビロンで發見された宗教的の文字と同様の物だからである。尙ニーベン氏の發見になる石碑は神殿の祭壇の周圍にあつたものであるが、泥を被つてゐた爲に、長年月に亘つても、字形がよく保護保存されてゐたものである。

ムー帝國の陥没は、一萬二千年以前と推定されるが、南アメリカへの殖民は、三萬五千年から七萬年以前とされてゐる。彼のノア洪水は、僅かに二十六呎の水深であつたが、それでも尙且つ當時の山嶽は水浸しになつてゐる。それは、當時の山嶽は皆低かつたからである。彼のヒマラヤ山脈の出來たのは、それから遙かに後世のことである。南米のアマゾン海のことには就いては、西藏の石碑上に明瞭に記されてゐる地圖に依つて、それが證明されるのである。

ペルー國の古都チチアナコはティチカカ湖岸にあつて、一萬三千五百呎の山上にあるのだが、往昔は海面上僅かに數呎の所にあつたのである。これは、アンデス山脈の生起によつて高まつたものである。と同時に、この大都是破砕されて、今日はその遺跡が残つてゐる



だけである。尙此所には太古ムー帝國から来た殖民團に依つて、カリアン王國が建設されたが、そのことは今日のカリビアン海で知ることが出来るのだ。然し後に此處にインカ帝國が出来た。(他民族は彼等をチャンカスと呼んでゐた)これは二千年前に、アマゾン河からペルーに来て築き上げたもので、大都市マナオ(黄金都市の意)を作つたが、僅か五百年程の壽命で、この帝國は、紀元一五三二年にスペインの爲に亡ぼされた。このインカ帝國は十三代の王朝を持つてゐて、初代マンコ・カマクは、太陽の子と稱せられ、妹を妻としてゐた。マクと云ふのはムー帝國王族の名である。最初の建國者は、マヤ族の分れたる中央殖民團のクキチニス族であつた、とアネロ・アリボと云ふスペイン僧侶は、一六三一年に記録してゐる。

古代ギリシャのアゼンス市は、一萬千五百年以前に陥没してゐるが、太平洋上のアトランチス大陸も略同時代に海底に姿を消してゐる。埃及の記録に依ると、アゼンスの成立は一萬七千年前と云ふことになつてゐる。小アジア最初の移住民は、カリアン族であるが、これは、南アメリカから赴いた種族である。彼等は千二百噸からの巨石を、山上に運び上げる程の驚く可き能力を有してゐたのである。

印度には、黒奴がムー帝國から最初に移住したのが、三萬年の以前であることは、印度の歴史家ヴァルミキが述べてゐる。

アトランチス大陸が、一萬千五百年以前に海中に没入した時には、この國の兵三千が、ボセイドン王に引卒されてアゼンスに赴いてゐたことは、トロイ古城跡の遺物中から發見されてゐるが、それは、「アトランチス王クロノスより」と記された品物に依ることを、シムリーマン博士が説いてゐる。このアトランチス國の歴史を、二萬年前に書き記した物が西藏寺院内に保存されてゐるが、それに依ると、この國は、アメリカと歐羅巴とを繋ぐ土地になつてゐたのが、地震の爲に切斷されて、獨立した大陸になつてゐたものであると云ふ。

埃及人は、ミソルの末裔であり、ミソルは又ソスの子、ソスはアトランチスから殖民して來た神官の子と云ふことになつてゐる。ソスはアトランチスのクロノス王の王女に戀をし、遁れて埃及のサイスに赴き、其所に一神殿を築いて、土民の教育に當つた。この埃及のナイル河の三角洲内に出來た殖民地が、アトランチスから來た最初の物で、マヤと呼ばれてゐた。



北歐スカンデナヴィア半島に、中央アメリカから最初に移民團の渡つて来たのは、五萬年以前のこと、これは、クエツアル王の部下の者が船又は徒歩に依るものである。當時にはこの兩者の間を歩行出来るような陸地のあつたことは、種々の遺跡がこれを證明して居るのである。コーカサス方面からこの半島に人の赴いたのは、それからずつと後のことである。このクエツアル族は、白色人種であつて、ノールウェイの古語は爲にムー帝國の言語と同系で、これをクアンランと呼ぶ。尙南方印度の言語も同様である。

蒙古の回紇帝國は、太平洋からウラル山脈迄の間の中央アジア及び中部歐羅巴に跨る大殖民地であつたが、これは、大地震の爲に住民の多くは死滅し、残り僅かの者が、佛國のブレトン、スペインのバスク、及びオイリシエとなつたのであつて、その使用のオイリシエ語が、今のキューバ島の土人、印度ネバールの土人及びアルメニア人の用語と相通するのは、その譯である。

此等第一期に歐羅巴に來た移民團の者達は、歐羅巴に山岳の出来る以前のことであつて第二回目の移民の時には、既に山岳が出来てから數千年を経た後のことである。この初期移住民達をクロ・マグノン族と呼ぶが、彼等が如何に高い文化を持つてゐたかは、今日ト

レコノスミルナに残つてゐる古代遺跡を見るならば、思ひ半ばに過ぎるであらう。而してこの民族の遺跡は、地中海の西部地方に澤山ある。

北アメリカのネブラスカのデンメン族や、歐羅巴古代民族等が死んだ時、彼等が必ず西方を向いて埋葬されるのは、西方にある母國ムー帝國に對してさうした形をとるのだが、反對に太平洋の西方に當るアジアに於ては、死者は必ず東方に向くのは、これ亦母國ムー帝國が他等から東方に向つて存在する證據なのである。現佛印のカムボディアにあるアンコルの門壁の彫獸の顔も亦東方に向つてゐるのは、同様に本國ムー帝國に向つてゐるのである。

埃及國は、割合に新しい國であつて、中央アメリカのユカタン國はこれよりも古く、南米のメキシコ國は更にそれよりも一層古い國と云ふことになるのである。ヒマラヤ山中の古寺院内には、七萬年以前の古文書が藏されてゐるが、これに依ると、人類の發生は、二十萬年乃至二十七萬年以前と記されてゐるのである。

古代佛蘭西の動物畫には、野牛の繪が描かれてあるが、それは、アトランチス大陸から移住させられたものであつて、米國にはその後運ばれて來たもので、決してアジアから



米國に來たものではない。その角が東洋から發掘されたと云ふのは誤りであつて、これはムスコオクス獸の角の誤認である。アジアにはこの野牛は全然居なかつたのである。尙アメリカの崖石上には、熊、鹿、イベクス、マンドリン等の諸獸の像が彫られてある。(註――日本の古記録には、北米をヒナタエビルス、南米をヒウケエビルスと稱して、日本と種々深い關係のあつたことが記されてある)

## 第二十一章 太古のギリシヤ

一萬二千年前から三萬年以前に遡る間のギリシヤの文明は、實に優秀なものであるが、この國の歴史は、僅かに第一回オリムピック大會のあつた紀元前千百四年から始まつてゐる。その當時のギリシヤはバルカン半島と地中海上の諸島を、全部領有してゐたことは、中央アメリカに於ける古代のメキシコ國と同様の状態にある。

ギリシヤ人は、埃及人と同様のマヤとアトランチスとから來たものであつた。アトランチス大陸の一大國家は、ギリシヤと戦争をして敗けたが、更にアトランチスからの遠征軍の兵士は、ギリシヤ國の大地震に依つて全滅してしまつた。即ちその時ギリシヤ國の半分は海底にアトランチス國やムー國と同様に没落してしまつたのだ。トロイ國には、大都市が六個あつたのだが、その時の山嶽隆起作用の爲に、只一個スミルナ市のみが残ることゝなつた。アメリカから行つたカリアン人は、スミルナで三度以上、トロイで四度以上も地



變の災害を受けてゐる。其所で、彼等は裏海に逃げて行つたが、其所にはセミチク族がゐたので、彼等と其所で接觸することゝなつた。古代のカリアン人は、ヘレヂスと自らは稱してゐた。イオニアとエーシャン海とを支配してゐたのは、イオニア人とドリアン人とであつた。それ等に追はれて、カリアン人は去つたのである。メキシコから出た土器の遺物中にギリシャの印の附いた壺があるが、これは五萬年以上の古い物とされてゐる。とに角カリアン人は、小アジアに多數の町を作つて發展したが、他民族とも旺んに戦争を行ひ、そして、地震の爲に、その都市は度々破壊されたのである。このカリアン族を初め、中央アメリカのアルス、カラス等は、皆マヤ帝國に屬して、その系統を引く愛蘭、スペイン、印度等には、皆同じ言語が残つてゐる。

古代ギリシャの言語も亦純粹なるカラ・マヤ語が多い。今日のこの國のアルファベットは明かにその事を物語るものであつて、これは、母國ムー帝國陥没を悼む爲の挽歌に依つて語の順序が定められてゐるのである。尙このムー母國の陥没の事を記してゐるのは、ギリシャのアルファベットに限らず、ユカタン、埃及、印度、カルデア、回紇等にそれ〴〵記録があり、更に後になつてイスラエル民族も亦その事を記してゐる。聖書にはムー國を帝國

と稱してゐる程である。

地中海東岸とシリア砂漠の北端との間のバイルト北東のバルベツクの古都は、太陽の宮と云はれたもので、高さ三百呎、幅百六十呎。其所に五十四本の柱が元は在つたのが、現在は六本だけ残つてゐる。高さ九十呎、直徑八呎である。ジュピター神殿には、九本の柱があつて、高さ六十五呎、その上に屋根が載つてゐる。露臺は三枚石からなつてゐて、長さ三百呎、十三呎の四角石で敷詰めてあるが、内二枚だけは六十四呎の大きさを持つ。地上二十呎の所に垣が出来てゐる。此等の石材は、いづれも一哩四分の一の遠方から運ばれたもので、十四噸、十七噸、七十噸の重量を有し、内には千二百噸の物すらもある。尙太陽の宮の柱の内の三本は、一七五九年の地震で倒れてしまつた。此建造物の事に就いては、ギリシャ、羅馬、埃及などの記録にも記されてゐないが、この大理石は埃及の中央部から運び出して來たものである。様式は後期コリンス式のそれである。尙この建造物は未完成であつて、建設者も知られてゐない。スルミナのカベルナムから、人骨が發掘されてゐるが、それは、五萬年以前の物と推定されてゐる。



## 第二十二章 埃及國成立の由來

埃及人はムー帝國から直接來たものであつて、東方印度洋を通つて來た者は下埃及に、西方大西洋を経て來た者は上埃及に、それ／＼國を作つたのであつた。埃及の西方に當る方向から來た者は、ナイル河の三角洲の上にサイヌの町を築き、東の方向から來た者は、グアルデファイ岬から紅海の頭部に來て、アフリカの東岸に居を占めることゝなつた。印度では、この殖民地の事を、マイオーと呼んだ。それは、この殖民地の首都の名であつた。其所からナイル河の方向に進んで行つて、其所で西廻りの連中と一緒になつて、盛大なる國家を作り上げた。然し、一萬年後にこの東西移民隊は戰爭を惹起して、下埃及方は敗北を喫したが、後に和睦して、遂に一大帝國を其處に形成することゝなつた。

ムー本國から太平洋を渡つて來たマイオー移民團は、初めバビロンに殖民地を設け、後に印度のナガスに赴き、其所から西行して、北部アフリカに到つたものなのである。従つ

### 埃及の「死の書」



ムー帝國の陥没其他太古世界創生の事を記せる貴重書なるも、從來の學者は多く

これを誤讀してゐた。即ち原文“Per—m—hru”を“Book of the outgoing

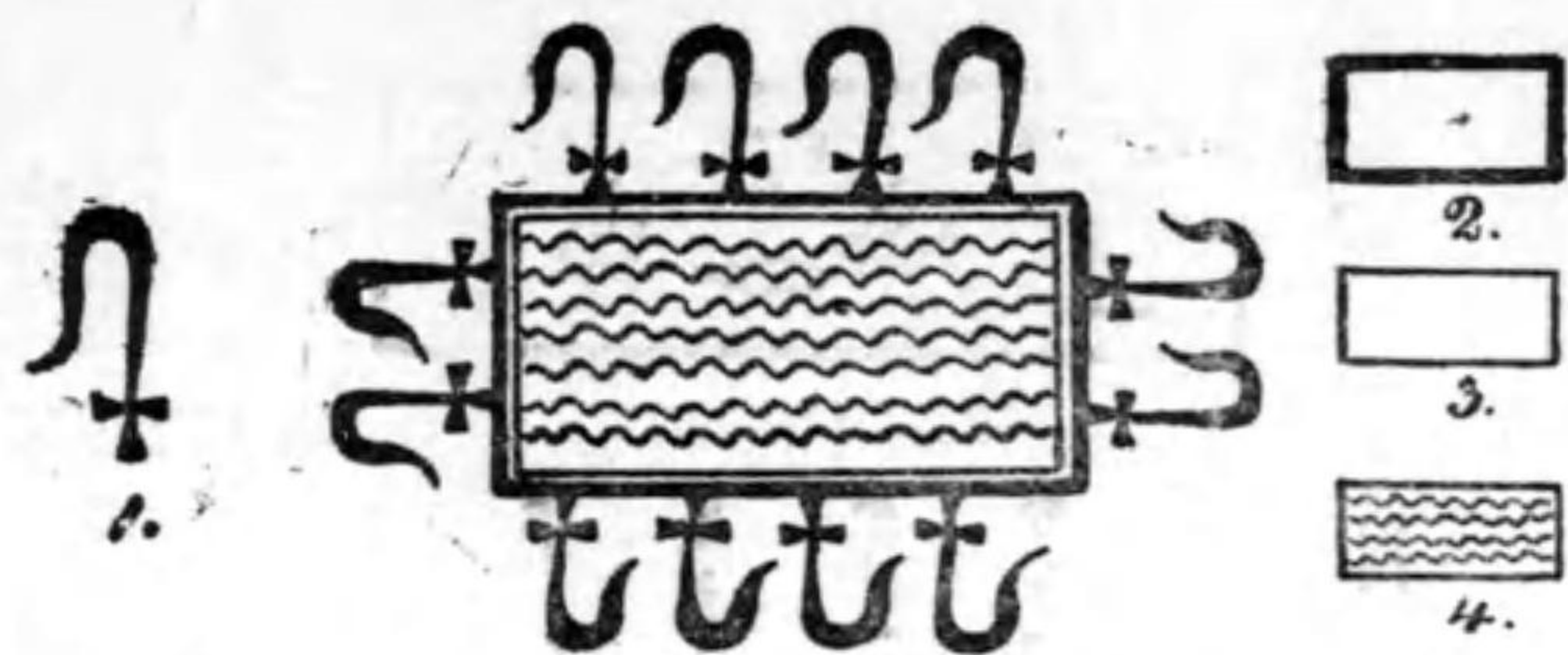
by day”又は“Coming forth by day”と讀んでゐたが、これは Per=gone

forth, m=Mu, hru=the day と讀む可きである。即ち“Mu has gone

forth from the day”「ムー國は日の目を見なくなつた」と讀む可きである。

Mを前置詞にするのは間違ひである。名詞になる可きである。この書はムー帝國陥没を追悼して書かれたものだからである。





これは埃及の「死の書」中に記されてあるムー帝國の陥没を物語る象文字であつて、分解すると(1)は火焰即ち地下の噴火 (2)はムー國のMの象形文字 (3)は深淵の象徴 (4)は深淵が火に充された事を示す。「ムー國は焔の淵に落ちて、火焰に包まれた」事を物語るものである。

て、アデン灣内の各所、紅海西岸の諸地に居を占めてゐた。印度及び埃及の記録に依ると、彼等は今日のスアキン町の近くに、一萬三千年程以前にゐたことが知られる。當時この地方には山と云ふものが無く、平地ではあつたが、然し、當時も尙沙漠であつたかは不分明である。

上下の埃及國を統括してゐた帝王の最初の者はマナ又はメネ王であつた。歴史上には、「北方及び南方の王」と記されてゐる。上埃及の起源は、天帝として太陽の象徴を用ひてゐるので、明瞭にそれと分る。然し、印度と埃及の記録では、この事が違つて記してある。二匹の蛇を持つた翼のある太陽の圓盤は、上埃及から下埃及に入つて來たものであるが、これは創造神を崇める印しであると同時に、母國ム

ー帝國の記念の印しでもあるのである。ナガも亦同様に蛇を用ひてゐるが、中央の太陽がその主な象徴を爲すものであつて、神聖なる天帝の象徴その物であるが、これは印度から來たものである。印度のヅアルミキの「ラマヤーナ」の中には、ナアカル人は、初め印度のデカンに居住してゐて、後にバビロンと埃及の兩殖民地に宗教と學問とを運んで行つたと記されてゐるが、この以外にも記録は現存するのであつて、アッカド人は、印度から埃及に赴く途中に助けを貸したことが記されてあり、マイオーの名は、トートメス第三世王の征略した地名簿中に出てゐる。ヌビアに於ける墓所地名表にも出てゐると云はれる。下埃及にアトランチスからソスに導かれて移民團のやつて來たのは、一萬六千年の過去のことであつて、當時もこの三角洲の土地は、熱い砂地であつたのである。當時理想の地とされてゐたのは、バルカン、小アジア、ユーカサス地方であつて、此等の土地は、樹が繁り、水が多くて、氣候が良いので、多數の移民が來住した。ソスが餘り香ばしくないナイル河の下流洲に居を占めたのは、他の理由に依ることである。クリートのマイカルネの石碑に依ると、埃及人は歴史の神ソスの子孫ミザルの孫と記されてゐるが、ソスはマヤの神官の子であつて、サイスの町に初めて神殿を建て、其所で母國の學問を人々に教へたと

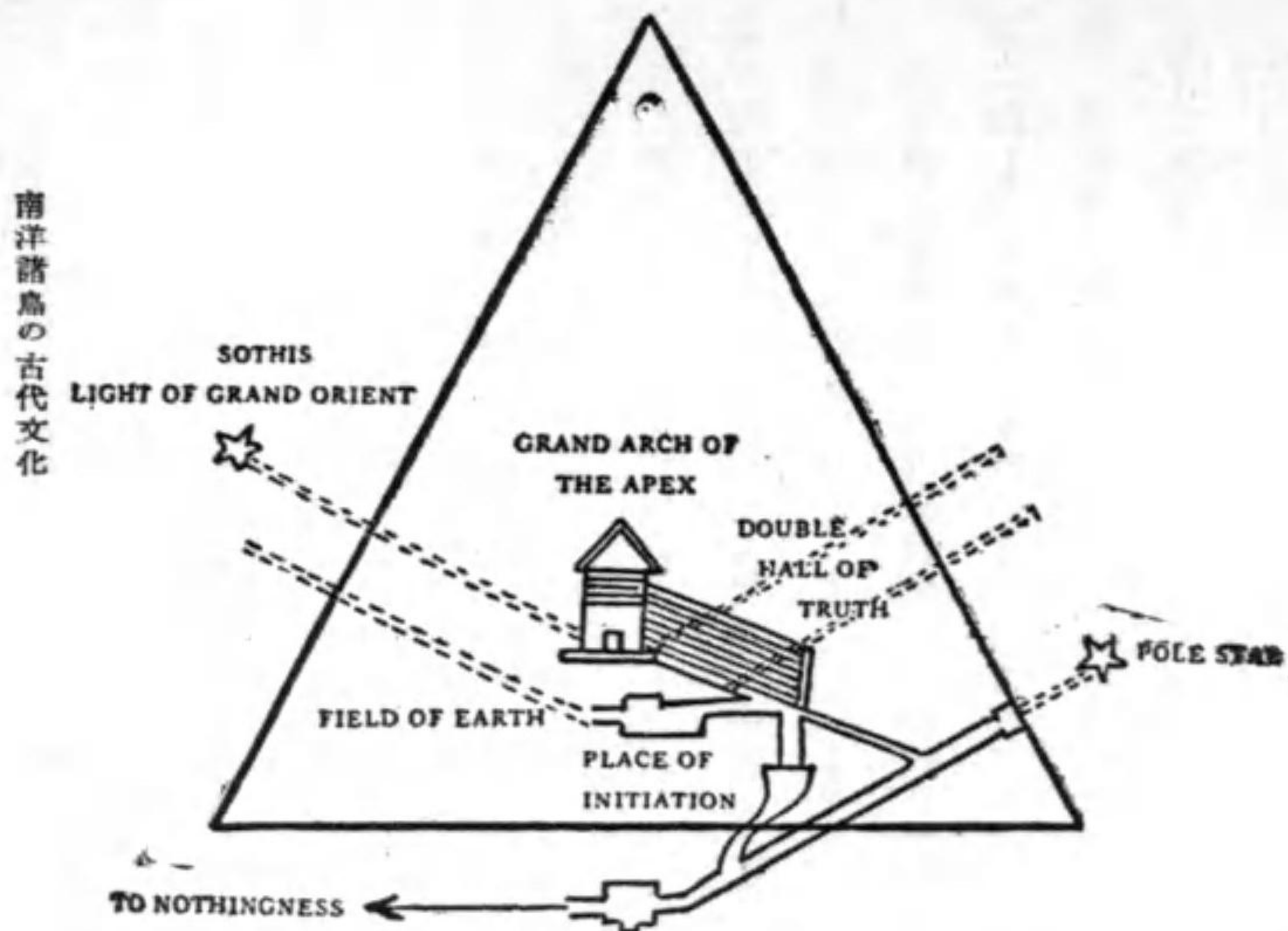


傳へられる。「トロアノ」記録に依ると、ムー女王は兄の怒りに觸れて、逃げてアトランチスからナイル河のマヤ殖民地に赴いてソスに逢ひ、ソスは其所で宗教の教師になつたと記されてある。

オシリスは、二萬二千年前にアトランチスに生れ、青年の時母國ナアカルの學校に學んで、教師の資格を得て歸國し、神官長として子弟に教育を授けた優しい人間だつたので、人民に愛されて、國王に推されようとしたが、弟のセトがこれを嫉んで、殺してしまつたと埃及人は思つてゐる。ソスはその教へを、埃及のサイヌに齎したのだと云はれてゐる。又ソスは埃及に生れたのだと埃及人は云つてゐる。

月の象徴たるイシスは、オシリスの妹妻であつて、女神なるが故に創造神とされてゐる。メキシコの石碑の上に、太陽神を上方に、創造の月神をその下方に示した物が、一萬二千年前に刻まれてあるが、その創造神は人間を作り、人間は男女を作り、次に二は三を作り、三から人類が出来たとかう記してある。印度、インカにも同様の概念がマヤから傳はつてゐる。

ホルスはオシリスとイシスの子で、太陽の象徴たるRAとして表はされてゐる。然し、



南洋諸島の古代文化

ピラミッド内の秘密室

ピラミッドの内部は、千古の秘密とされてゐたが、其所には、宗教上の最も神聖とされる祭壇、祈禱所、精神鍛錬所等が設けられてゐるのである。求道者、修道者は、此所に入つて所定の訓練、修養、試験を受けるのである。幾多の室へ幾段の通路を通つて出入する。所々に天空を仰ぐことの出来る穴が空いてゐるが、其所から空の星を、晝間でも明瞭に眺め得られる。

現在南洋諸島に廢墟になつてゐる古神殿の下に、これと略同様の秘密室が現存してゐる筈である。



このイシスとホルスのことが、ナアカルに記されてゐない所を見ると、埃及のみの象徴神であるようである。古代の埃及に於ては、帝國の出來上る以前には、神社が人民を支配してゐたのである。

ホルスの後に上下エヂプトが合併して、メネス王が位に即いた。宗教は二種あつて、上埃及は太陽を崇拜し、下埃及はオシリスを頭とする三位一體を崇めた。二千年間上下二派は戦争を續けて、國王が變つた。

この國の宗教家程悪い者はなく、アモンの神官は甚だ威張つてゐて、大金持となり、國王を左右するだけの権力をも持ち、遂に自ら國王となつたが、軍隊の反抗に逢つて、遁れてエチオピアに赴いた。

地下から發掘された木製及陶製の樂器を見るのに、風音、波音、鳥の啼聲等自然音を自由に出し得る物が、多數に作り出されてゐたらしく、頗る精巧を極めた物であるが、更に驚く可きは、髮の毛に依つて作られた豎琴のあることである。とに角、古代埃及の文化は極めて進化したものであつた。

## 第二十三章 南部亞細亞の征服

ムー帝國からビルマ、印度、バビロン、上埃及、ヌビア、ナイル河等に赴いた移民團はこれをナガと呼んでゐたが、後には彼等の居住地をもナガと呼ぶようになった。これが西方に赴いた第一線である。

第二線は、ムー帝國からマレイ半島南方印度(ドラ・ヴィダ)アフリカのヌビアの南方に赴いた所の黒色黒髮の人種で、今日タミルス人と呼ばれる人種の一團である。

第三線はアリアン人種の祖先を爲す所の回紇人であつて、これは北方路をとつて西進した最も重要な一派である。その回紇帝國は、ムー帝國から出た民族中最も大きな物で、又最も雄大なものでもあつた。その一部分はマレイ半島に赴き、クキケマヤと呼ばれた。皮膚の色は頗る複雑を極めて、白色から暗い褐色迄の數種類がある。日本民族は實にこの中に含まれる人種である。



他の線にモンゴル種があるが、これも亦重要な種族であつて、これは、アジアの北部に居を占めた。今の交趾支那もそれである。又支那の苦力はその子孫である。ビルマの古代は不明であるが、マレイ半島の全部を含んでゐて、今日の地勢とは、大に趣きを異にする。このビルマはナガ線の第一の足だまりであつた。その地名は「新しい國」の意味であつて、創造神ナガ七頭蛇をその象徴としてゐた。ヴァルミキの記す所に依れば、母國ムー帝國からビルマには一ヶ月で航海し得られ、其所から印度のデカンに赴くのが普通であつたと云ふ。

ムー帝國の宗教と科學とを教へる人がナアカルで、母國ムートの首都ヒラニブラを出て、ビルマの北方に來たのは七萬年以前であると、ヒマラヤの或寺院記録には記してある。カムボディアの中を流れるメイコン河の左右が、その殖民地であつたのである。佛國の學者が、アンコルで發掘を行つて、第一期の建築を紀元七世紀迄とし、これをキメル建築と名づけた。その以前の事は、不明とされてゐる。然し、その石造物は、中米のユカタン及びマヤ族の物とよく似てゐる。このキメル時代の七世紀の前半迄に出來た建物に、千二百ヤードと云ふ巨大な物があり、數萬個の石像も出てゐるが、此等に関する傳説は、何も分つ

てゐない。

最初の移住民はカムビア族と稱し、後にコイメンと云つたが、蛇を崇拜してゐた。キメル帝國は、五世紀の時に、印度からブリー・サンダに率ゐられて來たアリアン族に依つて作られたもので、紀元六百五十年に終りを告げてゐる。彫刻物中に、ラマとハヌマンとが荒れたラクシャ達と戦つてゐるのがある。ヒングの叙事詩「ラマとシタ」には、アンコル・トムは、アンコル・バトの北方三哩の所にあるキメル帝國の首都と記されてある。この都には、古くから建築家がゐて、數哩に亘る大都市を築いた。此帝國は二百年しか續かなかつた。蛇を創造神の象徴として崇敬した。宮殿は森林中にあるが、バトの物よりは少し小さい。でも、寶塔三十七個が社殿の周圍を取巻いてゐて、皆ブラーマ的な四個の面を持つてゐる。そしてこの面はいづれも皆東方を向いて、「母國よ！ 母國よ！ ムーの母國よ！」と叫んでゐるような形をしてゐる。口はMを示してゐる、ムー帝國の象徴たる蓮の花を頭飾りとしてゐる。この都は、一萬二千年前に、地震の爲に居住民が死んでしまつて、メイコン谿谷は海となつたのである。



## 第二十四章 太古の印度文化

ムー帝国の滅亡後に、哲學、科學、藝術に關する高級なる文化を持つ國は、印度のみと云ふことが出來よう。アッカディア、スメル、バビロン、上エヂプト等と同様に、この國も亦ムー帝国の子孫なのである。

インドと稱するのは、二千三百年前頃からのことで、その以前には、ナガ帝國、マハラルタ王國、ドラヴィダ等と呼ばれた。インドとはギリシヤ語である。例の歴山大王が、紀元前三百二十五年にこの國に侵入して、南西部のシンダ河の名を取つて、初めてインヅと名づけ、後にヒンヅと云ふようになった。然し、その河の所は、後にインダスと變つたが今日ではこの地方をシンダと呼んでゐる。

「ラマヤーナ」には、マヤは母國を出てビルマから印度のデカンに来て、ダナワスとなつたと記してある。西藏の記録に依ると、七萬年前に目黒く色の薄黒い民族が來たと記さ



南洋諸島の古代文化

### 印度セイロン島アナラジャプラにある彫刻物

この彫像は、その原住民が何所から渡來したかを説明するものである。中央下部の繪は、満開の蓮花を示すが、これは、母國ムー帝國を表はす。蓮花は地上で最初に咲いた花である。その外側は水を示す。次には家鴨が水上を走る姿を示すが、これは船を意味するかと思はれる。次に動物群が歩いてゐるが、その三種が描いてゐるのは、ムー國を示すものである。尙全體が半圓形を爲してゐるのは（爲に一般人はこれを月の石と呼んでゐる）殖民地の象徴である。全體の意味は「このセイロンに來れる民は、ムー帝國の殖民地から船に乗つて、太平洋を越して來れるものにて、その殖民地に來れる祖先は母國ムーから來れるものなり」



れてある。このマヤ族は、航海に巧みである上に、建築技術にも優れてゐたので、ドラヴイダ市と宮殿とを築き上げた。又彼等は勇敢でもあつた。勝利を得たタミルス人は、その國をドラヴィダ國と稱したが、それは、アリアン印度人の入り来る數萬年以前のことである。その後小王國に分れたが、タミルス人は、再び獨立して王國を築いた。其所へナアル人は、宗教と科學とを傳へたのである。

ナラナに與へられた歴史に依つて、ヴァルミキは「ラマとシタ」の生涯を、一大叙事詩に作り上げた。その詩に依ると、ラマは天體の子であるが、散文に依ると太陽の子、母國ムー帝國の子となつてゐる。彼はムー母國の王族であつた譯である。

紀元前五百年に書かれた印度の古文書に依ると、セイロン島のラワン王は、敵上に飛行機を飛ばして爆弾を投じたと云ふことが記してある。然し、その飛行家は捕へられて殺され、飛行機は敵將ラム・チャンドラの有に歸し、將軍はそれに乘つて、北印度のアジュダ市に歸つたと書いてある。この文書は、「ラマとシタ」と同じく、アヨディアの寺院から出たもので、二萬年以前に書き記された物と云へる。又紀元前千年に、マハ・バンタに依ると、一國王が友愛の印として、飛行機を一王侯に與へたと云ふことが記されてある所を見



南洋諸島の古代文化



二二三頁の圖は、印度ボンベイ附近アジャンタの洞窟内寺院に描かれてある彫刻畫で、これはムー國の生立と果物の豊富と生産的なことを示す物。中央人間は創造の數である七點を持つ。多くは蛇を描くのに、人間を描いたことは、人間が最初に生れて地上を支配したと云ふ傳説に當はまる象徴畫である。

ると、印度では過去に飛行機を大いに使用したと思はれる。所で、その飛行機の構造を記した物を見るに、原動力は大氣中から簡單に取つたらしく、その働きは今日のタービン式と似てゐる。機關室の一室に於て動力を出し、他の一室に於て排氣の作用が行はれた。尙右の機關は破れる迄は決して止ることなく、千哩三千哩は平氣で飛べ、その力は無限であつた。又ラワン王の飛行機が撃ち落されたのは、回轉砲の爲めであつたと云ふ。日の下に新しき物無しとは、將にこのことを云ふのであらう。然も、大空氣中たる動力を直接採ると云ふ科學的方法に至つては、驚くの外無いと云へる。

マヤは印度に來てナガとなり、タナバとなつた。ナガに關する傳説は不明であるが、その帝國は、今日のナグプール市のあるデカンであつたことは確實である。とに角、最初に其所に印度帝國を作つて、最初の帝國にラ・マを建てた。この帝國は三萬五千年前に出來て、一萬年繼續して、紀元前三千年乃至五千年に終りを告げた。

ナガと云ふのは、母國ムー帝國に於けるコブラの名である。印度では「造神」として崇拜されてゐたのである。創造の七つの命令を下す所の七首領を作つたが、然し、母國ムー帝國に於ては、創造神に對する象徴は他の物である。このナガと云ふ名は、母國の他の種族と區別する爲につけた名なのである。

マヤの王子は「ツウイラ・シダンタ」の著者と云はれてゐるが、この書は、印度最古の天文書なのである。マヤ王は、太陽の部分の化身であつて、科學を享ける爲の代表者とされてゐた。マヤ王子は、ナガ帝國の早い頃の王の一人子で、三萬年前に生れて、母國に赴いて科學を學んで歸つた。その天文學法は、三角學を用ひたる頗る進歩した學術を示すものである。これは、初め母國ムーで書かれ、これを印度に持ち歸つたものである。

「リグ・ヴェダ」は詩に記されたる智識であつて（リグは詩、ヴェダは智識）寺院の歴史と傳説とが記されてある。紀元千五百年以前の物は、實は數萬年前の母國ムー帝國の書であつて、ナアカル詩人の書いた物である。それをアリアン人が盗んで、己れの物としたのである。アリアン人がこれを書いた時には、未だ頗る無智なる人民であつたが、ナアカル人に依つて智識を授けられたのである。然るに、このナアカル人を印度から追ひ出してし



まつた。だが、この婆羅門達が學校を建てる迄は、學者と云ふ者がゐなかつた。彼等が宗教其他の學問を作るに至つたのは、餘程後のことに屬する。

ナアカル人は、ヒマラヤ山の南麓に寺院を建て、そして南方に赴き、又北に進んでヒマラヤの北の麓の西藏に入つて行つて、南麓から姿を消した。マヤはダナバスの主なる建築家であつたが、後にダナバスと呼ばれた所のナガの王子のマナは、大建築家で科學者でもあつた。そして、二萬年前に印度帝國に殖民地を開いた最初の人であつた。アルヤマはダナバスの一族のニヅアターカヅヤラに對して戰爭を挑んだ。とに角ナガ族は頗る強力であつて、その數は三千萬人を超してゐた。その首都をヒラニブラと稱した。

このヒラニブラと云ふ名前は、母國ムー帝國の首都の名と同じであるが、これはナゴ・マイ語の合成したもので、洋上生活者の家と云ふ意味から、航海者、水兵等と云ふ意味を持つものである。元來この語は、ムー本國の西部の灣名だつたのである。この都市の遺物は、今日南洋カロリン群島から見出されるのである。この本國の都市は一萬二千年から一萬三千年の昔に、母國ムー帝國と共に海中に沈んでゐるのである。

印度北方寺院に残る記録に依ると、印度の文明は、五萬年と云ふことになつてゐるが、

これは、中央アメリカのユカタンの記録と共通してゐる事柄である。印度は埃及と同様に最初から文明國であつて、野蠻時代と云ふ物を持たない國なのである。と云ふのは、文明の進んだ民族が、この國に移住して、その文明を築いたが故である。

印度の僧侶の目的とする所は、人民の精神に神祕、迷信、畏怖を育成して、そして、自分等の制御下に置かうとしたのである。従つて、石版上の文章は、これを顧る神聖な物として、これを民に教へることを好まなかつた。その神聖な書物には「農夫に蒔かれた種から生じた穀物は、創造者の一部分ではない。それは創られた物である。大工の作つた箱は大工の一部分ではないと同様である。然し、木の葉や枝は木の一部分である。故に、萬物は全部が皆神の一部分であるとは云へない。創られた物である。然しながら、人間だけは神の一部分である」人間は無から出立した。草が出来た。次に魚が出来、次に兩棲動物が出来、その次に爬行動物が出来て、そしてその次に胎生動物が出来て、それから後に人間が創られた。母の土から物質的肉體が生じ、そして、それは土に還る」等と云ふことが、記されてゐるのである。この教へに従ふと、人間は魂を持つことは教へられてゐない——否それは出来ないのである。



古い婆羅門の本と神聖書とを比較して見るのに、印度に於ては、多くの宗派と各種の宗教的意見とがあつたようである。然も彼等の多くは、ナアカルの持つて来た宗教とは、根本的なる相違を示してゐる。それは神聖書が石に彫られてから數萬年を経た爲に、彼等は只單にその文章や文句のみを重んずるようになった結果である。次第に翻譯されて行く内にさうなつたのである。北方印度の僧侶達は、最初から甚しい不都合を働いた。それは、人民の心を捕へて財物をせしめよう爲に、自分達を偉く見せかけようとして、曖昧なる教義を作つたことである。即ち瞿曇佛敎の單純不明なる教義に變革を與へた。即ち形而上學的な、神話的な、教義に改めて、何人にも解らんような物にしてしまつた。そして、ディアマ佛陀と云ふ物を、ダーニ・ボデイサトヴァスと云ふ精神的産物と共に發明した。そして、これを完成する爲めに、恐怖、迷信を増す爲に、神話的な人鬼レヅアなる物を崇拜す可きことを人民に強ひ、又神話的地獄を取入れ、埃及からも人鬼セトと地獄とを借入れて來て、人民に鬼と地獄とを信じさせるようにした。

神聖書は、初め人間に宗教を教へる爲に書かれたものであつて、先づ最初に人間をして神聖書を學ぶことを宗教と思はしめることであつた。そして、その宗教の基礎とする所は

愛であつた。天の神と神の事業に對する人間の愛であつた。天の神の聖なる愛は、彼の子の人間に對してであつた。各々の教へは平易簡明で、決して神學等と云ふ物は無かつた。誰にでもよく判つたものである。誰でも天の神に直ちに近づくことを教へられて怖れなくそれを信じた。凡ては愛であつた。手を擡げてゐる父の許に、子供が走るようなものであつた。愛は十二の大徳の首座を占めてゐた。愛は宇宙を支配してゐた。天の神は、大きな愛其物であつた。「地上にある天の大きな寺は？」と問はれると「人の心の中に、神を崇めるに十分なる寺がある。靜かに冥想し、愛するに完全なる寺がある。凡ての時と所とに寺がある。晝夜にも、人混みの町中にも、砂漠の中にも寺がある。愛と天とを崇める爲の寺がある。人が天の父と一緒になることの出来る爲に寺がある」

天帝には、種々の屬性を持つ多くの象徴があるが、その内二象徴が主要であつた。然もそれを了解することに依つて、母國ムー帝國を來た彼等移住民達の旅行通路を知る便宜が得られるのである。それは、太陽と飾りの蛇の象徴である。太陽の神聖なることは、それが集合的であり、一神教的な象徴を爲すからである。蛇は創造者としての天帝の象徴を爲すものである。天帝の一神教的象徴としての太陽は、RA又はLAと記されてゐる。太陽



と云つて、天空の丸い物體を示す場合には、各國語でその名を與へてゐる。これを象徴的に示す場合には、最初に先づ單なる圓周を示した。後にはこれをもつて宇宙の無限を示すようになり、そして、他の種々なる象徴に使はれるようになった。然し、特に一神教的の象徴として使はれる場合には、種々の物が周圍に附加されるようになった。即ちナガでは中心に點を入れ、<sup>クイグム</sup>回紆では小圓を附した。裝飾としての蛇は創造神の象徴であるが、ナガではコブラを選び、創造神の七命令を示す爲に、七頭を附けた。この象徴は、明かに母國ムー帝國の西岸南方半分の土地で用ひられてゐるものに相違ない。然し、ムー帝國の中央部に於ては、この象徴を用ひてゐない。ナガの北方では、クエツアコートル蛇の有り觸れた形を使用し、これをカンヌキ(汗)又はキングと呼んだ。東部の中央でもクエツアコートルを用ひ、又北方では大きな羽に掩はれた蛇をも用ひた。このクエツアコートルの變形の物は、北アメリカの西部地方で多く發見される。

## 第二十五章 アリアン族の南下

太陽と蛇の二種の形態を調べて行く時、太古の特別な民族が、人類の本源を爲すことが知られる。そして、それが何所で混血されて他の民族となつたか、明瞭に知られるのである。アリアン人が印度を征服したと云ふけれども、それは、ペルーのインカ人がアイマラス人に代つたのと同様、彼等は只單に其處に浸み込んで来ただけのことである。最初に印度に入りこんで来たアリアン族は、小團體であつて、ヒンズクーシユの小さな谷間から印度に下つて来て、マハラッタ・ナガの中に居を占めた。それは、ブンジャブのサラスワチ河の谿谷内であつて、ナガ族に其所で大に歓迎されたので、山中に残つてゐる仲間の者達を印度に呼び迎へたと云ふことになるのである。山から降りて来た彼等の一族は、數百年間に次第にその人口が殖へて、忽ち北部印度全部に溢れるに至つた。それは、紀元前約千五百年頃のことだ、このアリアン族を、ヒンズ・アリアンと呼ぶのである。



此アリアン族中のメディアヤ人とベルシャ人とは、紀元前八百年から千六百年の間に、山中の棲家を出始めて、千五百年には、全部山を出てしまつた。ヒンズクーシニにゐたアリアン族は、元ヒンズクーシニ近くのアフガニスタンの山中に通れ住んでゐた回紇族の子孫であつて、山嶽隆起の爲に其處に閉込められるようになったのである。メディアヤ人とベルシャ人とは、北方に於いての繋がりを持つのである。とに角過去數千年間彼等は不健康な土地に我慢をして居住してゐたが、人民が山谷に溢れるに到つたので、印度の沃野へと出て來たのである。そして、印度人に親切に迎へられることゝなつたのである。然し、彼等は長い間山中に苦しい生活をしてゐた爲に、教育と云ふ物が全く無かつた。印度原野に入つて數百年經過する内に、次第に北方印度の土地を占め、遂には先住者のナガ族を追い出すに至つた。然し、それは、決して戦争に依るものでなく、人口過剰の結果なのである。双方民族の混合も當然その間に行はれて今日の形を作るに至つたのである。所で、國を追はれたナガ族が、何處に行つたかは、不明である。

太古のマハラッタ王國は、北方に發生して南方に擴がり、中央に出て來て歴史上に現はれるに至つたのである。然し、その時には既にアリアン族に南方に追はれ始めてゐたので

ある。その時の首都はグワリオールであつた。當時ラジプタ王國は、ゴテに擴がつてゐた。サンスクリストの記す所に依ると、マハラッタ族は、アリアン族に追はれて南下したが、紀元千六百五十年から八十年の間に、モンゴル族が印度に侵入したのを打ち破つて、再び有名になつた。然し、サバジの時代からモハメダンの力は衰へたのである。とに角、マハラッタ王國は一萬年以上の歴史を持ち、ナガ帝國の後を繼いで、次に來るラマ帝國迄の間勢力を持つてゐたのである。

その他印度の小殖民地は、ニルギリ丘の中のオオタカムンドのマドラス地區内に見出されるが、其處にも亦古代ナガの印が見出される。このユダス族と云ふ餘り長くない歴史を持つた小人數の一族は、色が白くて、鼻はローマ型をし、大きな表情的な眼の下の齒も美しく、そして、丈高い立派な體格をしてゐて、何の掩ひもせぬ六七吋の髪の毛は厚く巻かれてゐた。正直で勇敢で、おとなしく、牧畜を業としてゐた。彼等は眞理を愛して社殿を神に捧げて、婆羅門を嘲笑の眼をもつて眺めてゐた。又カシユミール谿谷には、ナヤ族と云ふ民族が住んでゐた。彼等は七頭蛇のナガの象徴の天帝を拜んでゐたが、彼等は純粹なるナガ族の血を引くもので、アリアン族に追はれて此處に來たのであつた。このナヤ族は



今日も尙このカシニミールの谷に居住してゐるように思はれる。

婆羅門族は、ナアカルから學問を取つたのだが、元來この族は好學の民ではなかつた。然し雪山ヒマラヤの彼方中央アジアの方に行つて、學校を建てたりした。とに角、彼等は世界最初の科學と學問を傳へてゐる。ナガ族はバタラから來たと云はれるが、この Patala とは、Pa=over, ta=ground, la=Ra=Sun (The Land of the Sun) 太陽の土地を意味するのである。アルカデア人とスマル人とはバビロンに首都を建てた時、そこを Taka と名づけたが、これは The city of the Sun 即ち The city of the Lord の意味を持つのである。歴山大王が歸國に際し、インダス河口に港を作つて、これを Patala と名づけて、今日も残つてゐる。今日はそこを Tatta と呼んでゐる。

南方印度の原住民は、黒人であつて、これをタミルスと呼んだ。然し、彼等の出生地はムー帝國の南西部であつて、マレイ半島を廻つて印度に來たのであつた。然し、その道中が可なり長かつた證據は、彼等が多數のマレイ語を持つてゐるので解る。その彼等の印度に來た時は、ナガよりも以前か以後かは不明である。タミルス語は、尙マレイ語以外に、テラグ語、カナラツセ語等が混つてゐる。この黒人族が中央アジアを通つて印度に來たと

の説は、全然誤りである。その證據には、アジアの何處にも黒人族がゐないので分明である。



## 第二十六章 印度に學んだキリスト

カシニミールのレー市にあるヘミス寺院には、パリ語で記されたるキリストに關する記録がある。それに依ると、キリストは本國猶太國を出て、埃及に二年間滞在して、古代オシリス教を學び、それから印度に渡來したことが記されてある。

彼は、印度のベナレス市ラホール市等主なる都市を巡歴して、瞿曇<sup>ゴウタム</sup>佛敎を研究したが、更に西藏に入つて、其處に留ること十二年。その間に彼はムー帝國の神聖なる書物を學びムー帝國の偉大なる科學に通ずることが出來て、十二年後には、立派な教師としての資格を得ることが出來た。西藏の各寺院には、地上に於ける最も優れたる教師としてのキリストに關する種々の傳説が残つてゐるのを見ても、如何に彼は當時西藏に於て有名であつたか窺はれる。今日も尙彼の名は、何處の寺院に於ても深い尊敬の念をもつて呼ばれてゐる。又各寺院の老僧はよくキリストを知つてゐる。

それで、ヘミス寺院の院主の物語る所に依ると、元來キリストに關する傳説は、口傳へに傳はつて來たのだが、その忘れられることを憂へると同時に、その物語りの過られる事を心配して、今から千八百年か九百年以前に、記録されることになつたと。その記録に依ると、彼キリストが業を卒へて、いよく歸國せんとする時、師匠達との間に問答が取り換はされた。それは、復活に關する論議であつたが、計らずもそれは大論争になつたと云ふのである。

キリストは、ムー國の神書に依つて、人間の復活と云ふことは、肉體の復活ではなく、その人間以前の肉體を形作る所の原始的元素が復活するのであると述べた。即ち靈と魂とのみが復活するのだと主張したのである。それに對して、師匠達の云ふには、それは双方が復活するのである。靈と共に以前の物質的肉體も亦復活すると云ふのである。即ち、古い肉體の同一原子<sup>アトム</sup>は、再び新しい物に使はれることになると云ふのである。其處でこの論議の中心となつた靈魂論が、古碑文に如何に書き記してあるかを、ヘルミス寺院の院主の好意に依つて見せて貰ふことになつた。その碑文にはかう記してある——

「肉體は、母の土に戻る。その土から人間は生れる。而して、元素は、他の肉體を作る



爲に用ひられる」

師匠達は「他の肉體」と云ふのは、人間の後の肉體を意味するのだと主張した。この「他の肉體」と云ふ言葉の意味に疑問が掛つてゐるのである。それは人間の後の肉體を意味するのか、それとも、自然の作る所の肉體——魂の無い——を意味するかと云ふことになるのである。其處で碑文を見ると、かう書き記してゐる——

「人間即ち精靈は再生する。不滅の人間は、聖火であつて、その火の上に、家又は束縛されたる肉體は、元素を基として組み立てられる。この束縛されたる家は、原始的細胞に依つて作られるが、それは、生命力の電子 (Zii = electron) に依つて統一結合される。或時期が過ぎると、この原始的合成は亡び去つて、母の土に戻り、聖火は自由となる。或時期が来ると、原始的細胞の新しい一組が出来て来て、新しい家が再建され聖火を取入れる。原始的であるが故に、この家は又母の土に戻り、再び解放されて、聖火は自由となる。これが繼續し、聖火は他から呼び寄せられる迄一軒の家を占めてゐて、そして、終には聖なる本源の所に戻つて行く」

オシリス教とキリスト教とは、不思議にも一致してゐる。言葉も文句も同一の物が多

い。然しこれは敢て驚くには當らぬことで、ムー帝國の神聖書の與へた人間最初の宗教を双方ともに取入れてゐるが故である。オシリスとキリストとは、共に偉大なる天の父に選ばれた所の一種の道具のような物であつて、彼等は、人間の子孫達に永久に幸福なる路を教へる可く地上に送られた者と見る事が出来よう。

ヘルミス院主が更に物語るには、モーゼが埃及の帝王の面前で、神官共の多くの蛇を自分の蛇に喰はせて勝利を得たと云ふことが傳へられるが、この蛇が他の蛇を喰つたと云ふことは、神秘なことでも何でもなく、古來ムー帝國に傳はる所の科學を實驗して見せただけである。所謂今日の催眠術のようなものである。即ちモーゼと神官達とは、共に帝王と他の多くの者達に對して靈波を働かせたのである。然し、モーゼの靈波の方が強い爲に勝を占めたのだ。即ち神官達や帝王や群臣達はモーゼの靈波に支配されて、モーゼの蛇が他の蛇を喰つたと見たのである。事實決して蛇が蛇を喰ふことはしなかつたのだ。只見てゐる人々の頭の中に蛇の喰ふ幻影屢氣樓を描いたのである、と云つて、チャーチワードの手に持つてゐるステッキを、院主は見る間に變じ、又木片から火を發してチャーチワードの煙草に火をつけさせ、そして、その木片の火をチャーチワードに握らせて、少しも熱いと



感じさせない、と云ふような、所謂今日の人々が神秘又は奇蹟と稱する様な事を實驗して見せて、キリストが様々なる奇蹟を示したと云ふのも、皆この通りムー帝國から傳はる所の、太古の科學の一端を示したに過ぎぬと説明をしてくれた。

(尙キリストが印度に赴いたと云ふことは、一九一〇年頃に、ロシアの一學者が、印度の古寺院に於てキリストの肖像とキリストの書き記した文字——日本古代の龍文字——を發見したのを機會に、種々調査を行つて、これを自國に於て發表しようとしてニコライ教主の怒りに觸れ、佛國に亡命して、佛語をもつて「殘されたるキリスト」と云ふ書物を發表してゐる。更に又キリストが西藏に滞在中日本に來朝して、數年間神道を研究したこと、その後ゴルゴタの丘の十字架を運れて再び日本に來朝、百餘歳迄治病に従事して、青森縣五戸在に死去。今日其所に墓があり、子孫の澤口家が其所に現存することは、餘りにも有名な事實である。——譯者附記)

## 第二十七章 大回紇帝國

ムー帝國の殖民地中回紇帝國程偉大なるものは無かつた。太陽の帝國として、ムー本國に次ぐ大きなものであつた。その東岸は太平洋に接し、西方はモスコウ、歐羅巴を通じて大西洋に及んでゐた。北方は不明であるが、北氷洋に及んでゐたことは確かで、南方はコチンチャイナ、ビルマ、印度、ベルシャ等に及んでゐた。

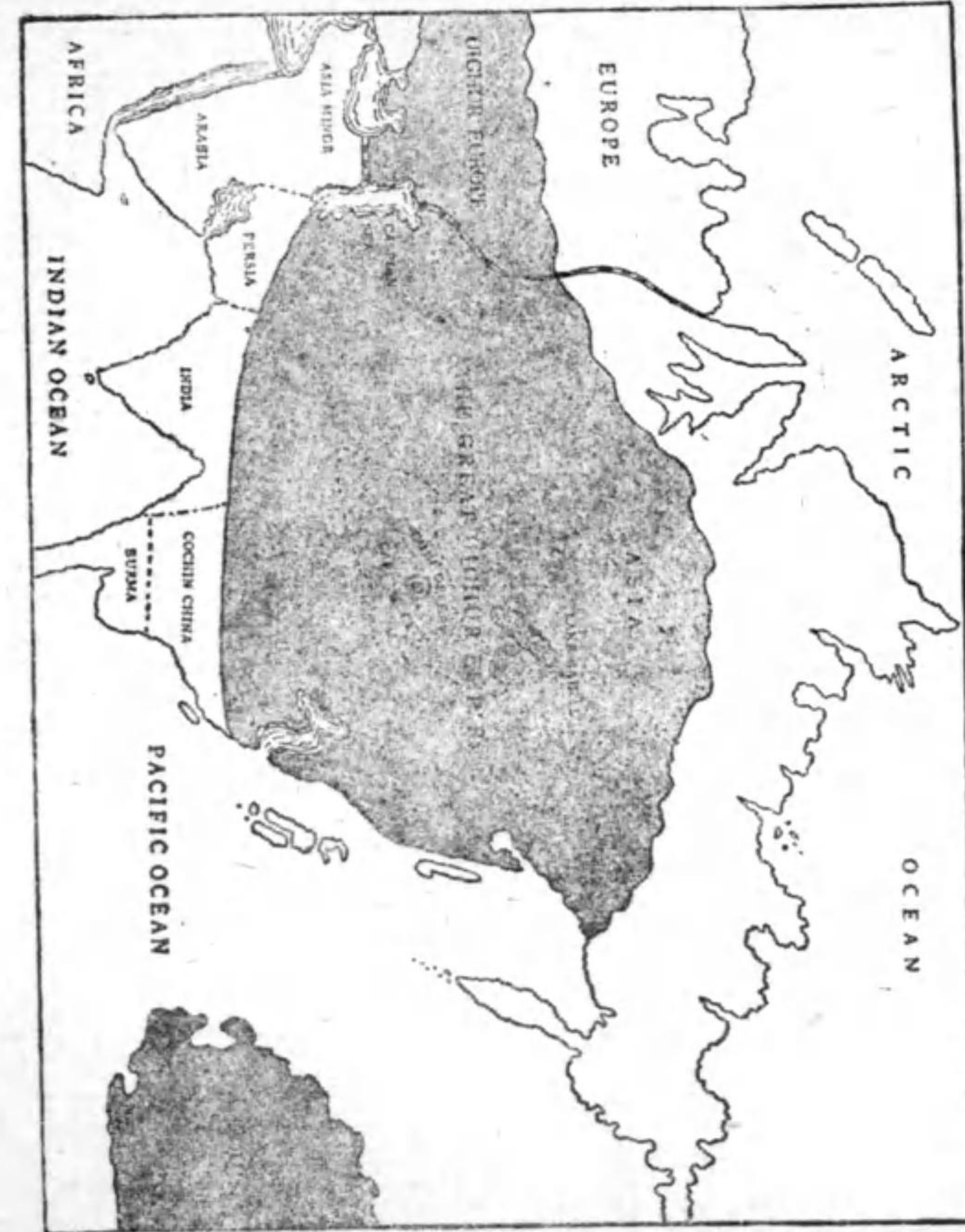
この國の歴史は、アリアン族の歴史とも云ふ可く、眞のアリアン族は、この回紇族の子孫なのである。彼等は回紇第三期時代に、歐羅巴各所に鎖狀をなして散在してゐた。彼等は大地震で山嶽の出來た時、ウイグルの本國が亡びたのに生残つて歐羅巴全體に擴がつた。それは最新生期時代である。スラブ、チュウトン、ケルト、アイリシユ、プレトン、バスター等の諸族は、皆その子孫に屬する。

この回紇帝國の最盛期の頃には、高い山と云ふ物は無かつた。ゴビ砂漠も無かつた。そ





外蒙古沙漠内の大古のカラコタ市から地理學者達の探検隊に依つて發掘された古代回紇國支配者女王並にその配偶者の像。その右方が女王であつて、王冠中央の三圓から上方に光を放つてゐるか、全體に光を放たぬのは、回紇國が殖民地帝國を示すものである。頭の後ろの圓形物は太陽を表象し、身體の後ろの大圓形は本國ムン帝國を象徴する。左手に持つ三角形の旗をした笏は、ムン母國の象徴。彼女の坐する蓮花は母國の王室の紋章であり、國花を示す。配偶者は笏を持たず、王冠中央から御光も放つてゐない。



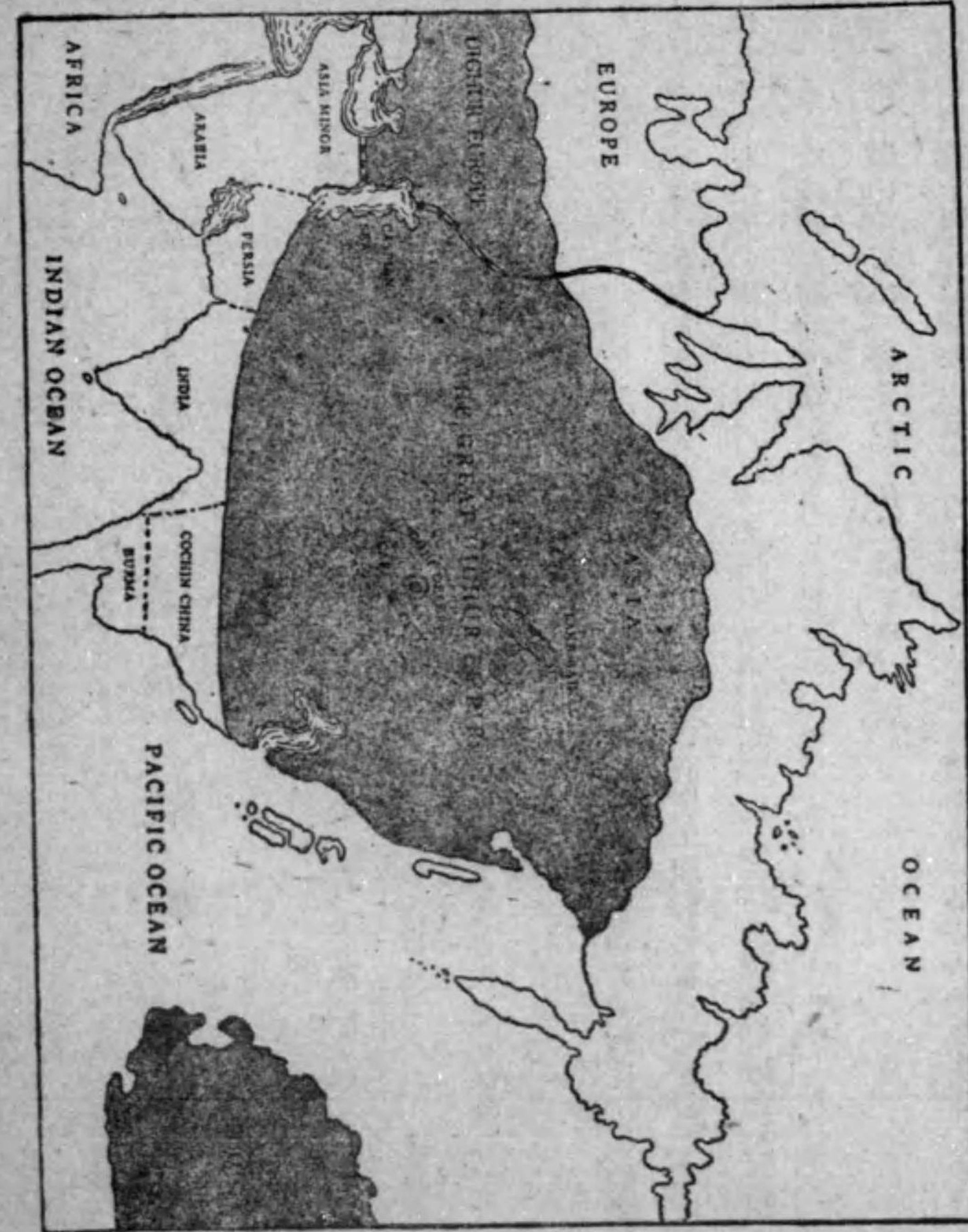
大回紇帝國の全圖

現在の支那全土は勿論西比利亞の半ば中央亞細亞歐羅巴の過半もその領土であつた。中央都市のカラコタは後のカラコラムである。





外蒙古沙漠内の太古のカラコタ市から地理學者達の探検隊に依つて發掘された古代回紇國支配者女王並にその配偶者の像。その右方が女王であつて、王冠中央の三圓から上方に光を放つてゐるが、全體に光を放たぬのは、回紇國が殖民地帝國を示すものである。頭の後ろの圓形物は太陽を表はし、身體の後ろの大圓形は本國ムー帝國を象徵する。左手に持つ三角形の頭をした笏は、ムー母國の象徴。彼女の坐する蓮花は母國の王室の紋章であり、國花を示す。配偶者は笏を持たず、王冠中央から御光も放つてゐない。



大回紇帝國の全圖

現在の支那全土は勿論西比利亞の半ば中央亞細亞歐羅巴の過半もその領土であつた。中央都市のカラコタは後のカラコラムである。



して、この土地は水の多い平原であつて、首都カラコタ市（後の成吉思汗の首都のカラコラム）は、今のバイカル湖南方に位してゐた。一八九六年に、世界中の有名な學者達に依つて組織された探検隊は、この古都のことを、西藏の記録に依つて知つて、わざ／＼調査に赴き、地下五十呎を掘つて、其所から貴重なる太古の遺物を得ることが出来たが、その資金に缺乏を告げたので、ロシア人のコスロフに後を一切委任して引上げて行つた。

東洋を通じての傳説に依ると、雪山を含む中央アジアの一帶は、その當時平地であつて湖沼河川に富み、地味肥沃、各都市間には立派な道路があり、壯嚴なる神殿、宮殿、政廳個人の住宅等が澤山建つてゐた。ゴビ砂漠の下から此等の物が發掘されてゐる。湖沼もその姿を地下に残してゐる。然も此等は、少しも洪水に傷けられてゐないのである。西藏の寺院内の記録には「七萬年前に、ナアカル人は母國の神聖書の寫しを、回紇の都市に齎らせり」とナアカルの文書で記されてゐる。最初にアジアの移民は、黄海のほとりであつたが「其處から内地に進んで行つて、ゴビの佳き土地に」進んで行つて、更に裏海に赴き、中央歐羅巴に出で、遂に大西洋に到つたのである。

各所に大都市を築いて行つたが、その後洪水の爲に其等は皆押流されて了つてゐる。



支那の書物に依ると、紀元前五百年に「回紇は白い髪毛を持ち、青い眼の民」と記されてあり、尙「回紇は色白く、目の色と髪の色とは、種類があつて、北方の者は青い目をして、髪毛は白く、南方の者は黒い目と黒髪をしてゐた」と記されてある。西藏の記録に依ると「回紇の都市は、東部の帝國と共に破壊された」と記されてゐるが、これは地理學的にその事實が證明されてゐるのである。最後の洪水は、<sup>ハイデル</sup>聖書にある洪水のことであつて、バイカル湖から、レナ河口に流れて北氷洋上の島々に及んだものであるが、この洪水には氷塊は含まれてゐないで、南方から北に向つて大々的に流れたものである。グリニッチ東徑一〇度から先きにその痕跡の無いのは、氷の無い結果である。レナ河口のストラコフ島には、マンモス其他の怪獣の遺骨が見出されるが、それは、右の洪水に氷塊が無つた爲に、此等の骨骸は押潰されずに残つたのである。北米東部は氷塊の爲に、動物の骨は皆破砕されてゐる。さて、この北半球に起つた大洪水の結果として、回紇大帝國は流出してしまつたが、然し、西部と南部とは無事に助かつた。然しながら、その後に出來た山嶽の爲に、互に交通は困難となつて了つた。尙この地變には熔岩も流れ出たし、岩石も出來た。然し住民の多くは、山中に逃げ入つた。ゴビに於ける流水の模様も大變化を來した。即ち今迄

の地上の水は、皆地下水となつてしまつた。今日ゴビ砂漠に於て、地下七呎乃至十呎の所に滾々と流れる地下水のあるのは、その時以來の物である。

回紇人は、中央歐羅巴に擴まつた。印度のマスの本に依ると「回紇人は、裏海の北東南に移住したとあるが、これは二度目の歐洲入りで、山嶽の出來た爲めに元の所に住めなくなつて西行するに至つたものである」マクスミューラー曰く「中央アジアの山中から、初めのコーカシア人は小團體で來た」と云ふのは、この事を指すものである。これは、造山作用で、住めなくなつた結果西に赴いたものである。それは、<sup>プレისტセン</sup>最新生期の時代のことであつた。

造山期、洪水期以前、即ち二萬年以前の回紇帝國は國土が廣まつただけに、その遺物は各所から發見される。バルカン半島、愛蘭、佛國のブレトン、スペインのバスク等から澤山出て來る。東方記録に依ると、回紇帝國は、多數の小國を所有してゐたと云ふことである。而して、回紇國の統治する主權者は、ムー本國から交代で來てゐたと云はれる。



## 第二十八章 神秘國西藏の由來

西藏は、中央アジアにあつて、東は支那に、北はモンゴリアに、南は印度に、西はカシユミール、トルキスタン等に境する國で、ゴビ砂漠は、その北方に當つてゐる。昔は回紇帝國の一部分であつたが、それは、造山以前のことと、その時には、この國は平地であつたが、今日では世界の屋根と云はれる大山嶽國となつてしまつた。印度が神秘國神秘なる科學の國と云はれるが、西藏も亦さうであつたのである。寺院が多くて、住民は閉ざれたる生活をしてゐる。ナアカルの子孫であるが、三千年前に、婆羅門族に追はれて印度から入り來つたと云はれる。母國ムー帝國の原始宗教と科學とを有してゐる。

今日此の國の多くの寺は、佛教を奉じてゐるが、佛教に非るものが三寺ある。數年前にシュリーマンが、ラサ市の古寺院内からムー帝國の滅亡したことを記した石碑を發見した。それは、バリ語と西藏語との混交した物であつた。それは、數百となくある石碑の中

の一つであつた。山の下のアラマブートラ河の一支流の所に一寺院があるが、其所にも數千個の石碑がある。これ等は元首都のナアカルの圖書館にあつた物と思はれる。一人の老僧は、若い時にこの寺院を訪づれて石碑の話しを聞かされたと言つた。「大洪水が東北アジアに起つた時、回紇の首都は流された。人と書物とは亡びた。それは、母國ムーから來た物であつた。洪水の害を受けない西方のナアカル人は、石碑を掘出しに行つて、それを持ち歸つた。その後生残つたナアカルの子孫達も石碑を掘出して、今の西藏の寺院に持つて來た」と云ふのである。尙この寺院には、二人の英人と、二人のロシア人とが訪ねて行つたことがあると云ふ。

老僧に、この圖書館が完全に残つてゐるかを訊ねたら「敵軍の爲にリシ市のアヨディアは破壊され焼却されたが、その時寺院の寶物も災厄を被つた。然し、圖書館は敵軍に發見されなかつたから、今日でもその寺院に完全に埋つてゐると思ふ」と、かう述べた。



## 第二十九章 日本人及び支那人の起源

日本國は、傳説に依ると、クイチエ・マヤ族の一派が、ムー帝國からマレイ群島に赴いたもの、内の或一派であると云はれる。この移民團は、マレイに暫く居を占めてゐた後に北行して新領土を得たのである。それが、日本人の祖先である。日本人も亦それを是認してゐる。然し、日本にある傳説とは少し違つてゐるが、材料的には合致する。

この移民團は、日本に到着した時、高い文化を築き上げ、教養を樂しみ、地上最高の文明を持つに至つた。今日凡ての點に於て、近代的高位置を占め、最も進歩的な民族であることは、五六十年間に大變化を行つたことでも知られる。この國の數百年前の様子を見ると、宛も一萬五千年前のムー帝國を見るかの感がある。この國の國旗は、ムー本國から持つて來た所の太陽の象徴である。この國は太陽の帝國である。古代宗教の概念は、ムー母國の象徴を持つてゐる。各種の習慣は、世界最初の文明と關係を持つてゐる。

智識人は、日本人をモンゴルと信じてゐるが、これは大なる誤りである。白人と黒人と違ふが如くに、日本人と蒙古人とは違ふのである。日本人は、ムー母國のクイチエマヤの子孫である所の白人種の一つなのである。日本語には、今日クイチエマヤ語が四〇パーセント含まれてゐる。

支那の文明は古いと云つても、たかゞ五千年にしか過ぎない。その文明は、支那人自身で作つたと云つてゐるが、それは嘘で、母國ムー帝國の傳承に過ぎないのである。

支那人はモンゴリア人の如く見えるけれども、モンゴリア人はこの國に半分しか居ないで、祖先は白色人種のアリアンであつたのである。回紇帝國の時、白色回紇人が南方の黄色蒙古人モンゴリアンと結婚をして、そして子孫を儲けたのであつた。その時に出來た文明が、第一期の物である。記録に依ると「回紇人黄色奴隸中の最良の者と結婚した」と記してあるが、これは誤りであつて、奴隸と云ふものはその當時に無かつたものである。黄色蒙古人は、智識程度の低いものである。多くの支那人は頗る高級であつて、色も白い、智識程度の低い苦力クラフには、回紇人の血は流れてゐないのである。この苦力は黄色蒙古人の子孫なのである。



回紇人の父母達は、雜婚に依つて出來た子供達を、回紇式に教育して、そして、大文明を作らせたのである。それに關する多くの記録は、タオ寺院に残つてゐる。支那學者の中の少數者もそのことは認めてゐる。「日の昇る遠い國から來たもので、アジアに生れた者でない」と云ふ傳説が支那にはある。尙支那古代の各王朝は、神話的、傳説的のものである。回紇大帝國亡んで七八千年間に、東方アジアに多數の小國が出來たが、これは、皆モンゴリア型のものである。その中でも、最も大きいのはタルタル族で、成吉思汗と忽必烈は、その代表的人物である。孔子は紀元前五五一年から四八〇年迄ゐたのだが、彼の後三百年後に、初めて支那の歴史は現はれたのである。紀元前二一四年に秦の始皇帝は支那に關する文書を燒却して、孔子其他の文書も姿を消したが、然し、全部が燒かれた譯でなくその殘本は、今日タオ寺に保存されてゐる。

### 第三十章 バビロンの興亡史

バビロンの歴史は、アッカデア人、スメラ人、カルデア人、セム人、アッシリア人、メデア人、ベルシヤ人等の歴史から成立つものである。印度からナガ・マヤ族が、ユーフラチス河畔に移住したのは、一萬八千年以上の太古である。その後暫くして、東方の端の所で、同じくムー帝國から來た民族に出逢つた。それはセミチック人であつた。

アッカデア人の最初の者は、ナガ・マヤ族であつて、この團體は、印度からベルシヤ灣を通つて來た者達であつて、ユーフラチス河口にその居を占め、其處をアッカドと稱した。アッカドとは、ナガ・マヤ語で「柔かい濕つた土地」と云ふ意味で、今の洲アムールを指したものである。彼等の來住した時に就いては、印度古寺院にその記録は無いが、約一萬八千年以前のこと、思はれる。彼等は此處で民族としての發展を十分に遂げた後に奥地へと進んで行つた。



スメル人は又他のナガ・マヤ族であつて、スメルとは「平地、平原」の意味で、彼等の居住地を指したものである。然し、アツカド人と同族なのである。印度のヴァルミキが紀元千三百年に記す所に依ると、このユーフラチス河の殖民地をバビロニアと稱し、その主都をバビロンと呼んだと云ふ。このバビロンは又別に *Ba.Ba* とも稱した。これは、ナガ・マヤ語で「太陽の都」と云ふ意味である。「印度を出たナガ・マヤ族は、バビロンに行つて、母國ムー本國の宗教と科學とを教へた」とある。

アツカド人とスメル人とは、共に北方のセム人よりも遙かに學術及び文明は進んでゐた。彼等アツカド人の居住する河の附近には葦が生へて居り、猛獸がその中に澤山ゐたので、彼等はその村落や家屋の周圍に防柵を設けてゐた。この柵のことをカルデイと呼んだ。學校や社殿は勿論この柵内にあつたが、いつの間にかこの學校と學者達のことをカルデイと呼ぶようになった。當時この村落内に居住する者は、國籍の如何を問はず、皆この學校に通つて勉學する義務を持つてゐた。そして、此處で古代のナガ・マヤ語を學んで、神秘なる神聖書と藝術と科學とを學ばせられた。當時イスラエル人も多數この柵内に居住してゐたが、彼等も教育を受けて、次第に智識が向上した。ダニエルの如きその一例であ

る。彼の「壁の手記」にナガ・マヤ語で書き記された物を讀むことが出来たので、それを國王に讀み聞かせたとある。又ネブカドネザル王の宮廷内には、天文學と魔術に關する研究團が置かれてあつた。

カルデア人は、スメル人、アツカド人達がセム人に征服された後に、北方から來たのだが、バビロンに來る以前の名前は分つてゐない。セム人はアツカドとスメルの文明を獲得して、そして、この先住者達を殺したり奴隸にするようなことをせず、自分等と同等に扱つて、そして結婚をした。彼等は又先住者の科學者を大に尊重した。歴史には「バビロンの古き文化のあつたのは、カルデア人の來る以前のこと、それは、アツカド人、スメル人の物であつた。アツカドとスメル人とは、カルデア人に征服されて歴史から消滅した」とあるが、これは大誤りであつて、カルデア人は國民又は民族ではなく、單なる一派であつて、學者が多數に居り、文化を所有してゐた。ヘロドタスは云ふ。「初期バビロンの僧侶の史家ベロサスは、バビロンの最初の住民は、外人で他種族の者であつたと云つてゐる。又メソポタミヤに文明を持ち來つたのは、オーネスと云ふ六人の者であつて、彼等は半人半魚であつた。そして、ベルシャ灣から上陸した」と。この *Oonias* 又は *Hoanias* と



云ふのは、ナガ・マヤ語の *Ta=water, a=they, no=house*、即ち「短舟に住める者」の意である。ペロサスがナガ・マヤ語を用いた所を見ると、彼はカルデア人であつたと思はれる。そして、河に來たと云ふのは、印度から來たことを云ふのである。スメル人及びアッカド人の文明は、彼等を亡ぼしたセム人よりも遙かに進化してゐたことを語つてゐる。古代ギリシャ文に依ると、スメル人とセム人との最初の會見模様を詳しく書き記してゐる。「セム人の小部隊が河岸に待つてゐた。彼等は鎧を纏ふてゐた。七人のアッカド人が舟から上つて來たが、鎧の光るのを見て驚いて河中に飛び込んだ。そして、水中から首を出して岸の方を見ると、未だピカ／＼光つてゐるので、又水の中に潜りこんだ。又そつと首を上げて見ると、最うその時には光る物は見えなかつた。この河岸に待つてゐた鎧を着た武者達は、半人半魚を見たと、歸つて報告をした」と云ふのである。

バビロンの文化は、紀元前七千年と云ふが、印度の記録にある一萬五千年と云ふ方が正しいと思はれる。とに角埃及よりも古いのである。紀元前七千年と云ふのは、セム族がアルディアとスメルとを征服した年代なのである。數千年間に、スメル人とアッカド人とは、バビロン文化を築いて、そして、藝術と科學とを實施し、多くの著述をした。楔形文字は

その使用文字であつた。彼等を征服したセム族は、マヤ語を多數に採用したが、この古代語は、紀元前十二世紀頃にバビロンに於ては不用語となり、ナガ・マヤ語が代つて六七世紀頃迄科學語として使用されて残ることゝなつた。セム族が移住して來た時には、カルデア又はカルデア人を科學及び學問の爲に採用したが、この時とてもカルデア人と云ふ國民はなかつた。彼等は單なる一團體に過ぎなかつたのである。

アッカド人及びカルデア人の言語とナガ・マヤ語との類似を左に示す。

初期のバビロン帝國は「北方から侵入し來れるセム族の作つたもので、その起源は神秘的」であると云はれてゐるが、別に神秘的な事は無いのである。彼等セム族は、當初ムー本國から米國のユカタン半島に渡り、其處にザヒアと呼ぶ町を作り、其處から數哩離れたウズマルにも少し居住した。其處から東方大西洋を渡つて歐洲大陸に上り、裏海周圍のコーカサス平原に居を占めた。其處に初めて聖書に記載される所のアララット山なる物があつた。この山は高さ千五六百呎である。埃及人はこの國をユカタン名前のザヒア (*Zahia*) と呼んでゐた。南方に其處から下つて行つて、そして、アッカド人とスメル人とを征服することゝなつたのである。然し、この帝國は、彼等のみで作つたものではなく、アッカド



Akkadian Chaldean	Hindu Naga-Maya	
Abba	Ba	父親
Bala	Pal	仲間
A	Ha	水
Pab	Kab又はCab	床 几
Gé	Ké	下、降る
Kak	Kak	完全、完了
Kas	Ca	二 ツ
Ké-acu	Kelé	内側、反対側
Ki	Kilacabi	人民、住民
Kul	Kul	動物の臀部、動物の種
Kum	Kun	尾
Kiu	Kiu	黎明
Kú	Kub	場所
Lal	Lal	取る
Ma	Ma	土地
Ja	Ja	地面、國
Ra	La	立つてゐる所に向つて
Men	En	有る、私はある
Nana	Naa	母親
Sar	Zae	白
San	Can	四 ツ
Sir	Zozil	光り
Tab	Tab	加へる、結合する
Xa	Cay	魚
Xas	Chac	切る
Xir	Chi	叫ぶ、語、語る
Idu	U	月
Hurki	Hul-Kin	日射病

人もスメル人も一緒にゐたのである。

アシリア人も亦セム族であつて、その起りは、コーカサス又はザヒア殖民地であつた。アシリアとは、彼等の住んでゐた地名なのである。このアシリアと云ふ土地は、上部チグ

ラス河とサゴロス山との中間地であつて、その當時はヴァッサル地方であつた。彼等は勇敢で戦闘を好み、ベビロン政府の羈絆を脱して、獨立をし、次で近隣を征服して、やがてはベビロンその物をも支配するに至つた。これがアシリアベビロン國である。そして、アシリア帝國は紀元前九世紀迄その獨立を保つてゐたが、この元氣瀟々たる好戦族も紀元前六百二十五年にメディアに亡ぼされてしまつた。その壽命は案外に短かつたのである。



## 第三十一章 ベルシヤ帝國の崩壊

回紇帝國ウイグルの南西部に隆起した山嶽中にゐた回紇人は、回紇帝國の亡びた後に史上に上り來つた。それは、八千年から一萬年程以前のことである。彼等は人口が殖へて、最早山中にゐることが出来なくなつて山を下つたものである。それは、紀元前二千年から千五百年頃のことである。彼等は下山するのに四路をとつた。第一の者は、ヒンヅークシニの隣りにゐた者達で、印度に向つて二途から入つた。一はアフガニスタンを通り、他はカシニミールからアンジャブに赴いた。この移動は紀元前二千年から千八百年にかけて、千五百年には終つてゐた。同時に、イラン沙漠とベルシヤ灣の北東岸の間に下山した團體があつた。これがベルシヤ人となつたのである。その地は大きな高原と廣い谷とからなつてゐる。山岳地だつたが、然し彼等の故郷の山程険しいものでは無かつた。第三に裏海南方のアルメニアとサゴロス山の東との間の大平地に出たものがある。これがメディア人である。彼

等は其土地の先住民スキチア人を追ひ出して其處に住つたのである。

このメディア人とベルシヤ人とは、回紇を通じて來たムーのアラヤ族から出たもので、大回紇帝國とは別に、一大帝國を作ることゝなつたのである。種族、言語、宗教等この二族は全く同一であるのに、紀元前六百年にメディア人は山岳帝國を作り、ベルシヤ人と對抗する立場となつたことは、ベルシヤ史にある通りである。ベルシヤ帝國はシルスが作つたのであるが、紀元前五百五十八年にメディア王アステイアゲスを破つて、メディア國を屬領とすることゝなつた。

このメディア人とベルシヤ人とがバビロン帝國を支配した最後のもので、從來數千年間バビロン國を支配してゐたセム族を全部追ひ放つたのである。かくて、紀元前五百三十八年に、バビロン帝國は、ベルシヤ帝國に併合されてしまつた。そして、大ベルシヤ帝國はそれから二百二十七年後の紀元前三百三十一年に滅亡して了つた。その間全世界に誇る勝利者としての誇りを恣にしてゐたのである。アジアの西方南部を攻略して埃及に入り歐洲の小部分を奪取しギリシヤに於て歴山大王に喰ひ止められた。ギリシヤは、全世界を奴隸とする大帝國を喰ひ止めたことは二回ある。その第一回は、紀元前七千五百年にアトラン



チヌを打ち敗かせ、第二回目はこのベルシャ國を敗かしたのである。  
 ベルシャの國旗は、帝國殖民地としての寓意を示したもので、水平線上を登る太陽の形である。これは、回紇とムー本國とを結ぶ印でもある。ムー帝國から東方と西方とに赴いた殖民隊が、バビロンに於て結合したのである。即ちアルカディア人とスマエル人とが、ムー母國から西方に來た殖民線の一端を示し、メディア人とベルシャ人とは又他の西方線の一端を示すものである。セム族中には、東方線の主流の一端を見ることが出来る。このように、多くの線の端が一個所に結合した例は、地球上他に見出すことが出来ない。埃及に於ては、僅かに二線が合し、西部歐羅巴にも只二線が合流してゐるのみである。

### 南洋諸島の古代文化〔終〕

會員番號一〇五五〇六號

昭和十七年十月十五日初版 印刷  
昭和十七年十月二十日初版 發行

〔三〇〇〇部〕

出文協承認  
あ80321號



南洋諸島の古代文化

定價貳圓八拾錢

配給元

日本出版配給株式會社

譯者 仲木貞一

發行者 岡村祐之

印刷者 庄司万治

印刷所 庄司印刷所

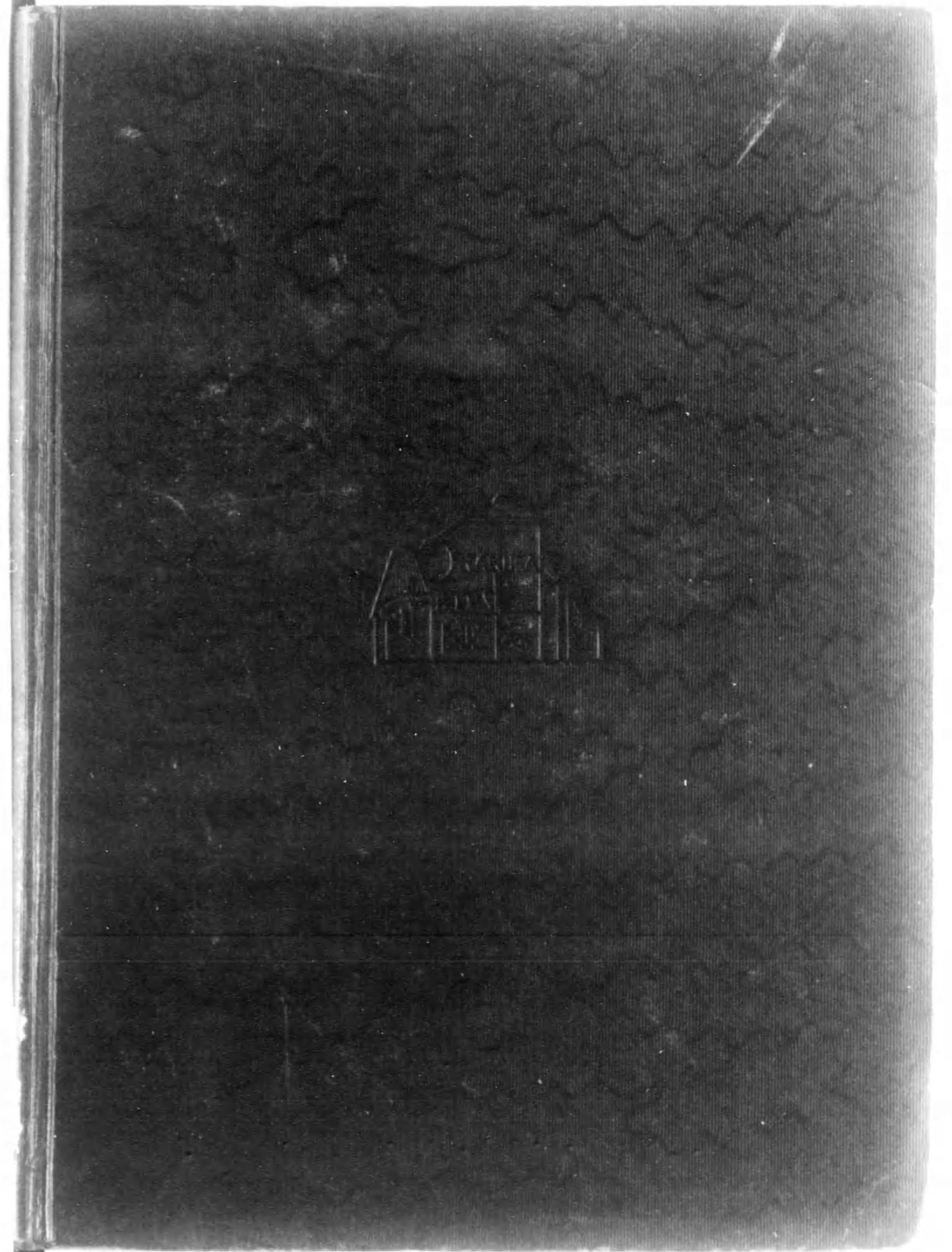
發行所 會社 岡倉書房

東京市神田區淡路町二丁目七番地  
電話 神田二〇一〇・二〇一一番  
振替 東京二五九三五番











終